秋田県文化財調査報告書　第136集

蝦夷塚古墳群発掘調査報告書

－一般国道107号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

秋田県埋蔵文化財センター

1986・3

秋田県教育委員会

蝦夷塚古墳群発掘調査報告書

－一般国道107号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

1986・3

秋田県教育委員会

空から見た蝦夷塚古墳群（真上より）　高度 457.2mより　1985年10月26日撮影

巻首図版二

空から見た蝦夷塚古墳群（西方向より）　高度 420mより　1985年10月26日撮影

序

豊かな現代生活をめざした地域開発の促進は、秋田県にとって重要な課題であり、交通網整備事業もその一つであります。一方、本県には先人が残した数多くの埋蔵文化財が存在しており、この貴重な文化遺産の保護もまた私たちの責務であります。

このたび、一般国道107号改良工事に伴う路線が蝦夷塚古墳群を通過することになったため、範囲確認調査の結果に基づき、本年度発掘調査を実施いたしました。

この結果、奈良時代の終末期古墳6基とそれに伴う土師器や須恵器と縄文時代の土壙や土器などが検出されました。古墳は本県において非常に数が少なく貴重な遺跡であります。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものでありますが、今後、多くの方々に活用され、埋蔵文化財保護に対する御理解と歴史研究の一助となれば幸いと存じます。

最後に、本書を刊行するにあたり、多大の御協力と御支援をいただいた秋田県土木部、秋田県平鹿土木事務所、福地土地改良区、雄物川町教育委員会、雄物川町郷土資料館、地元各位に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月31日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1　本書は秋田県教育委員会が昭和60年９月２日から10月15日にわたって実施した、秋田県平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚51番地に所在する蝦夷塚古墳群の発掘調査報告書である。

2　本書の執筆は栗沢光男が行い、編集は秋田県埋蔵文化財センターが担当した。

3　別編Ｉの「蝦夷塚古墳群の火山灰の鉱物化学的分析」は、東北大学農学部庄子貞雄教授・山田一郎助手にお願いした。

4　第２図は、昭和59年12月５日に雄物川町郷土資料館が実施した蝦夷塚古墳群範囲確認調査で確認された古墳の分布図（同町郷土資料館より本書掲載許可を得たものである）と、本年度秋田県教育委員会が実施した蝦夷塚古墳群発掘調査で検出された古墳の実測図を併せて作成した、蝦夷塚古墳群の古墳分布状況図である。

5　参考図版と蝦夷塚古墳群出土玉類実測図・計測表の玉類は同一のものである。これは昭和33年７月地主の佐藤金一氏が７号墳の付近から採集したもので、現在は雄物川町郷土資料館に展示されている。本書への掲載は同町郷土資料館の御好意による。

6　土色、土器の色調の表記は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

7　古墳には検出順に秋田県教育委員会（昭和58年度）と雄物川町郷土資料館（昭和59年度）が行った蝦夷塚古墳群範囲確認調査からの通し番号を付した。また秋田県教育委員会が行った蝦夷塚古墳群範囲確認調査で付したＳＤ（溝または溝状遺構）番号のうち、古墳周堀のＳＤ番号は欠番とした。他の遺構にはその性格ごとに検出順に通し番号を付した。

目　　次

序
例　言
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　立地と環境……3
　第２節　歴史的環境……4
第３章　発掘調査の概要……8
　第１節　遺跡の概観……8
　第２節　調査の方法……9
　第３節　調査の経過……10
第４章　調査の記録……13
　第１節　検出遺構と遺物……13
第５章　まとめ……32
別編Ⅰ　蝦夷塚古墳群の火山灰……35

図　版　目　次

巻首図版１　空から見た蝦夷塚古墳群
巻首図版２　空から見た蝦夷塚古墳群
第１図版　遺跡遠景……37
第２図版　発掘調査前のようす　発掘調査終了後……38
第３図版　調査風景……39
第４図版　調査風景……40
第５図版　遺跡基本土層図……41
第６図版　１号墳検出状況　１号墳完掘状況……42
第７図版　１号墳周堀火山灰検出状況　１号墳周堀土層……43
第８図版　１号墳周堀遺物出土状況……44
第９図版　２号墳検出状況　２号墳完掘状況……45
第10図版　２号墳周堀土層　２号墳周堀開口部……46
第11図版　２号墳周堀遺物出土状況……47
第12図版　３号墳検出状況　３号墳完掘状況……48
第13図版　３号墳周堀火山灰検出状況　３号墳周堀土層……49
第14図版　７号墳検出状況　７号墳完掘状況……50
第15図版　13号墳検出状況　13号墳完掘状況……51

第16図版　1号墳出土土器……52
第17図版　1号墳出土土器……53
第18図版　2号墳出土土器……54
第19図版　調査区外北側畑地表採遺物……55
参考図版　蝦夷塚古墳群出土玉類　（雄物川町教育委員会所蔵）

挿　図　目　次

第1図　蝦夷塚古墳群と周辺の遺跡……2
第2図　秋田県内古墳分布図……5
第3図　蝦夷塚古墳群の古墳分布状況図……7
第4図　遺跡土層柱状図……8
第5図　グリッド配置図……9
第6図　遺構配置図……11・12
第7図　1号墳実測図……15・16
第8図　1号墳出土土器(1)……17
第9図　1号墳出土土器(2)……18
第10図　1号墳出土土器(3)……19
第11図　1号墳出土遺物(4)……20
第12図　2号墳実測図……21・22
第13図　2号墳出土土器(1)……23
第14図　2号墳出土土器(2)……24
第15図　3号墳実測図……25・26
第16図　7号墳実測図……27
第17図　13号墳実測図……28
第18図　SK01・02・03・04土壙実測図……30
第19図　SD01溝跡出土遺物……31
第20図　SD04溝跡出土土器……31
第21図　調査区外北側畑地表採遺物……33
蝦夷塚古墳群出土玉類実測図・計測表（参考資料）……56

表　目　次

第1表　周辺の遺跡地名表……3
第2表　秋田県内古墳一覧……6
第3表　1号墳出土遺物観察表……20
第4表　2号墳出土遺物観察表……24
第5表　一次鉱物組成……35
第6表　粒度組成……35

第1章　は　じ　め　に

第1節　発掘調査に至るまで

雄物川町にかかる一般国道107号のうち東里部落から大沢部落までは道路幅も狭いうえに急なカーブなどもあり、交通量の増加に伴いスムーズな流れを得るため改良を要望されていた。

このため秋田県土木部では、東里部落を起点に造山、南形、深井部落の南側を迂回して大沢部落に至る全長約4㎞の一般国道107号バイパスの建設を計画したが、路線の一部が周知の遺跡である蝦夷塚古墳群の区域内を通過するため、秋田県土木部から文化財保護法による発掘調査の依頼が秋田県教育委員会にあった。これを受けた秋田県教育委員会が昭和58年度の蝦夷塚古墳群範囲確認調査に基づいて、本年度緊急発掘調査を実施したものである。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名　蝦夷塚古墳群

遺跡所在地　秋田県平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚51番地

調査期間　昭和60年9月2日～10月15日

調査対象面積　1,444㎡

調査面積　1,400㎡

調査主体者　秋田県教育委員会

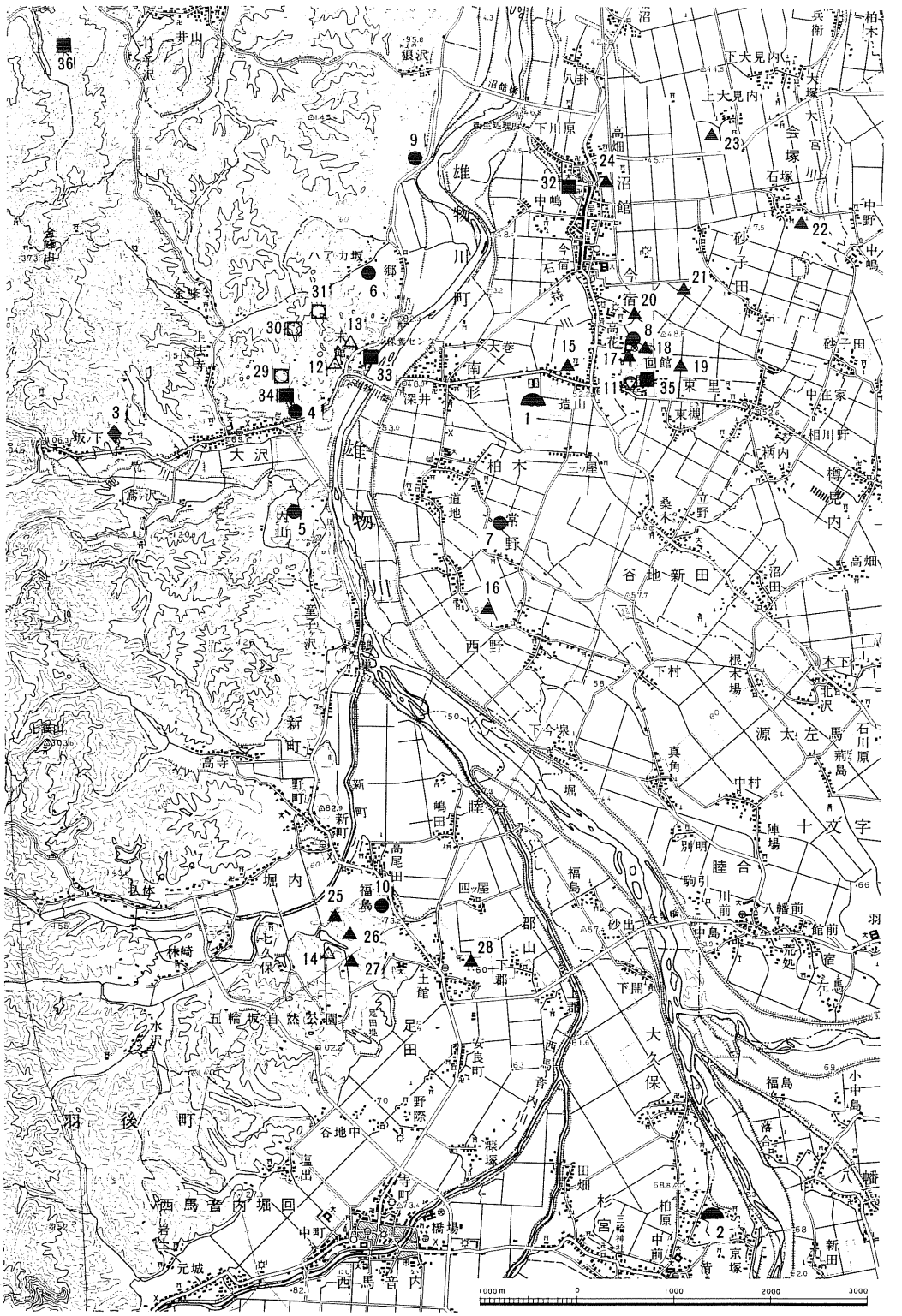
調査担当者　柴田陽一郎・栗沢光男（秋田県埋蔵文化財センター　文化財主事）

事務担当者　加藤　進（秋田県埋蔵文化財センター　主査）、佐藤　健（同　主事）

調査作業員　大和谷長右エ門　佐々木政吉　大和谷哲治　深川専之助　佐々木養吉　安部正松　佐藤嘉太郎　小野茂治　高橋正男　大蔵一男　佐々木豊　畠山総一郎　小西良雄　長沢涼　石渡萬治郎　福岡芳太郎　佐藤重次郎　佐藤喜一　佐々木嘉信　大日向倉松　佐野真由美　鈴木多津子　武田明子　小松浩子　土田寿子　佐藤喜子

整理作業員　高橋フサ子　皆川恵子　斉藤美江子　青谷　透

調査協力機関　秋田県土木部　秋田県平鹿土木事務所道路課　福地土地改良区　雄物川町教育委員会　雄物川町郷土資料館



（国土地理院五万分の一「浅舞」使用）

第１図　蝦夷塚古墳群と周辺の遺跡

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

蝦夷塚古墳群の存在する雄物川町は、南北約60km、東西約15kmにおよぶ横手盆地の南西部に位置し、北は大森町・大雄村、東は平鹿町、南は十文字町・羽後町、西は東由利町と接し、面積73.39km²、人口約１万３千人の町である。

町の中央部を奥羽山系に源を発する雄物川が諸河川を受け入れながら北流し土地を二分している。雄物川の西岸は出羽山地の一角を占める山麓地帯で、東岸は平坦肥沃な典型的水田地帯となっている。また、大曲市から雄物川沿いに街道が通じ、町の南部を東西に由利・平鹿両郡を結ぶ国道107号が通じている。

蝦夷塚古墳群は、北緯39°16′30″、東経140°25′30″に位置し国道107号を横手市から本荘市に向かう途中の雄物川町造山部落の南側に存在する。雄物川から東へ約1.8kmの地点で雄物川の洪水によって形成された自然堤防上の微高地に立地している。遺跡のある微高地は南北に長く、西側は雄物川の旧河川敷内で一段低くなっており、南・東側は緩い傾斜面となっている。

遺跡の標高は49m前後の平坦地であり、遺跡付近のほとんどは水田であるが、一部転作によって畑地となっている。

第１表　周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	蝦夷塚古墳群	奈良	13	末館II窯跡	奈良・平安	25	新城川地区遺跡	奈良・平安
2	柏原古墳群	〃	14	七窪窯跡	〃	26	ひばり野I遺跡	〃
3	新道I遺跡	旧石器	15	造山神社裏遺跡	〃	27	ひばり野II遺跡	〃
4	根羽子沢遺跡	縄文	16	上西野遺跡	〃	28	城神廻り遺跡	〃
5	内山III遺跡	〃	17	雄物川高校II遺跡	〃	29	大沢森経塚	中世
6	郷遺跡	〃	18	雄物川高校裏遺跡	〃	30	北野一号遺跡	〃
7	常野遺跡	〃	19	廻舘II遺跡	〃	31	北野二号遺跡	〃
8	雄物川高校I遺跡	〃	20	今宿南田遺跡	〃	32	沼館城	中世城館
9	兵部ケ沢遺跡	〃	21	下作の瀬遺跡	〃	33	末館	〃
10	新城川遺跡	〃	22	石塚遺跡	〃	34	館森館	〃
11	十三塚遺跡	弥生	23	大見内遺跡	〃	35	廻館	〃
12	末館I窯跡	奈良・平安	24	千刈田遺跡	〃	36	赤館	〃

第２節　歴史的環境

西方から出羽山地、雄物川、沖積平野という自然地形の雄物川町（地域）は、原始・古代においても自然条件が人々の生活に好適であったらしく、多くの遺跡が発見されている（第１図、第１表）。ナイフ形石器を出土した旧石器時代の新道Ⅰ遺跡[註1]、県内最古の組石の検出された縄文時代前期の根羽子沢遺跡などは雄物川西岸の出羽山地麓にあって、東里地区の十三塚遺跡のような弥生時代とそれ以降の時代の遺跡は東岸の沖積平野に主として立地している。

奈良時代の天平５年（733年）に出羽柵が庄内地方から秋田高清水岡に移されるとまもなく、内陸横手盆地にも律令制が及び、雄勝郡が建てられる。天平宝字３年（759年）には雄勝城が築城されて盆地平野部の積極的な開発が進み多くの集落が形成され現在の雄物川町一帯も確実に令制下に入る。平鹿町中藤根[註2]、下藤根[註3]などの遺跡はこの期の代表的集落で、雄物川町末館地区の古窯跡群は須恵器を城柵官衙遺跡へ供給した生産遺跡である。

秋田県内の古墳遺跡は殆んど終末期の群集墳で、米代川中・下流域を除く各地にその分布が見られ、その位置は令制下の城柵官衙遺跡周辺および駅家とその道筋に多い。10kmとはなれていない羽後町新城地区に雄勝城の擬定地足田遺跡[註4]が存在することをも考慮する必要もあろう。この古墳群の周辺には造立神社、首塚神社の祀られている径10m程の円墳状の塚など古墳の言い伝えを残している遺跡が結構多い。やや離れた沼館地区の千刈田からは永延３年（989年）銘の瑞花双鳳文八稜鏡、奈良時代に勧請と伝えられる大沢地区の上法寺遺跡からは同じ平安時代の双鳳文八稜鏡の出土があり、古代の乏しい文献資料を補う豊かな遺物、遺跡の存在する地域である。また、後三年の役に清原家衡が立てこもり源義家を撃退した「沼柵」は、沼館であるとされている[註5]。このように雄物川町一帯は、原始においては川や山の幸に恵まれ、古代以降においては俘囚長清原氏の存在でも理解されるように、それに加えて豊かな生産力を約束された地帯であったと考察される。なお古代においては雄物川西部の大沢地区は雄勝郡雄勝郷に、川の東部沖積地地域は平鹿郡邑知（おうち）郷に含まれていたと見られている。

註１　雄物川町役場　『雄物川町郷土史』　1980（昭和55年）

註２　秋田考古学協会　『中藤根遺跡』　1974（昭和49年）

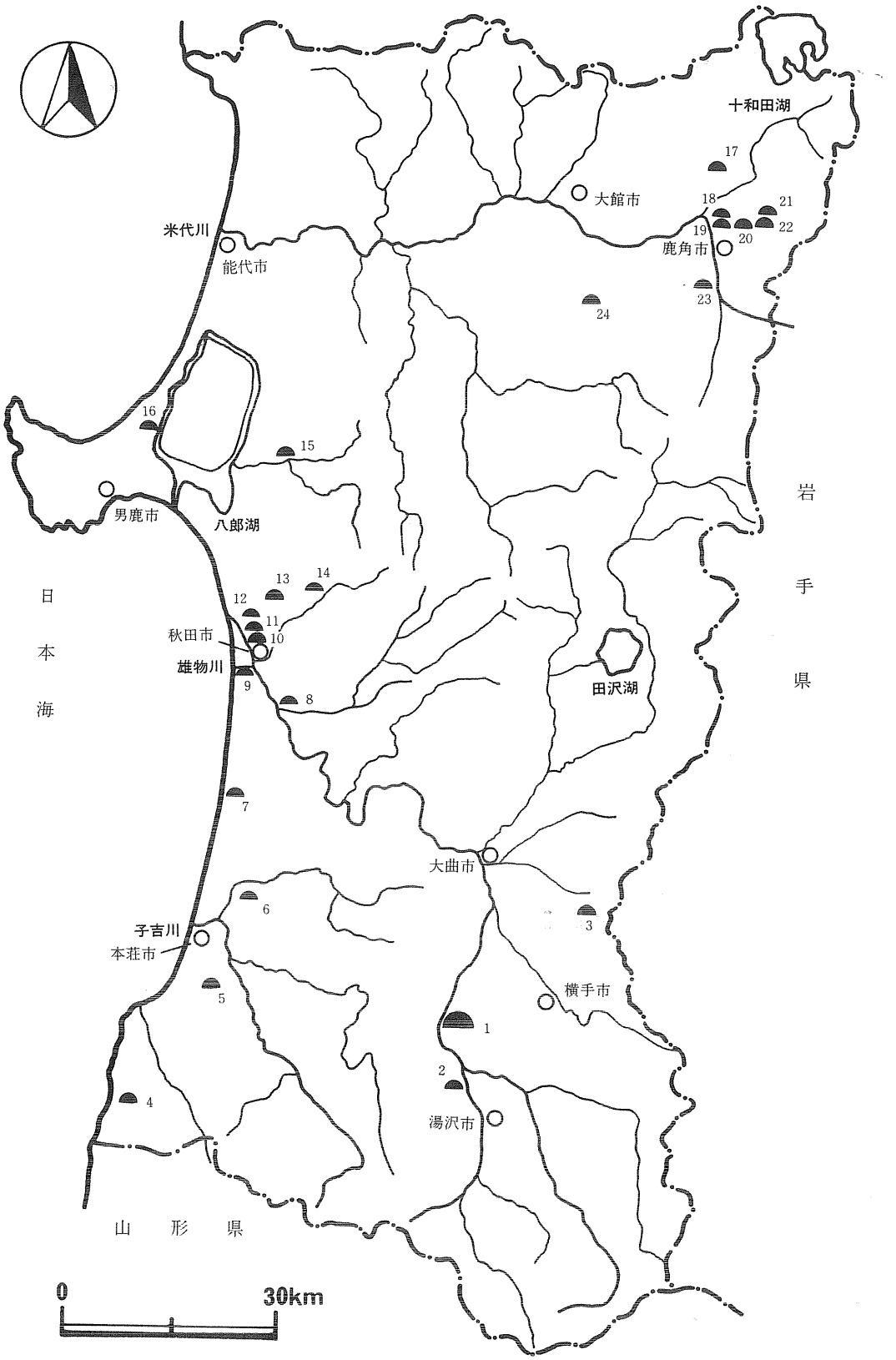
註３　秋田県教育委員会　『下藤根遺跡発掘調査報告書』　1976（昭和51年）

註４　秋田県教育委員会　『足田遺跡発掘調査概報』　1967（昭和42年）

　　秋田県教育委員会　『足田遺跡第６次発掘調査略報』　1972（昭和47年）

　　羽後町教育委員会　『足田遺跡第７次発掘調査略報』　1974（昭和49年）

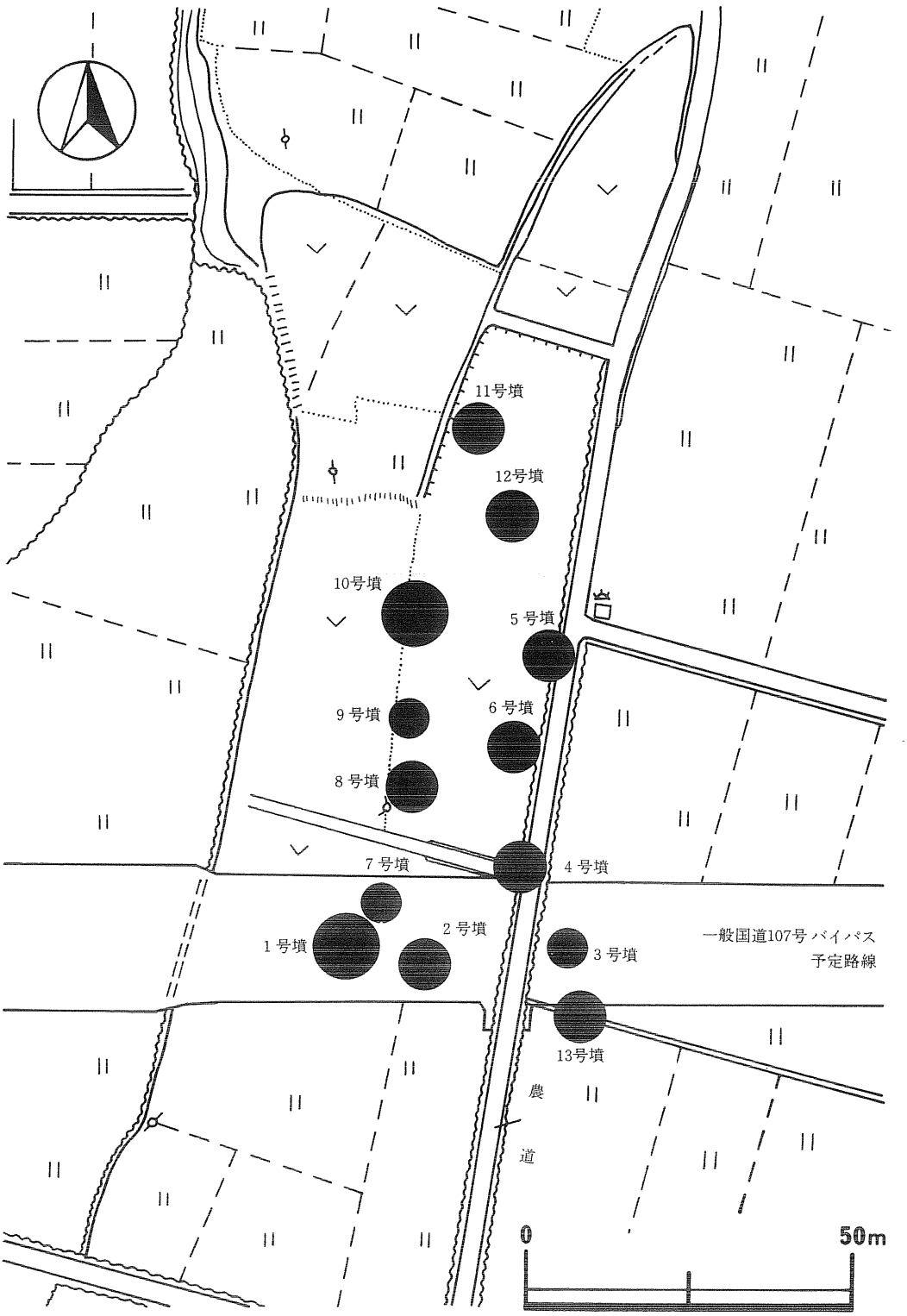
註５　註１と同じ



第２図　秋田県内古墳分布図

第２表　秋田県内古墳一覧

番号	遺跡名	所在地	外形	立地	出土品
1	蝦夷塚古墳群	平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚51	円	自然堤防上	玉類・刀子・鉄鏃土師器
2	柏原古墳群	雄勝郡羽後町大久保字柏原	円	河岸段丘上	直刀太刀・刀子・鉄鏃鉄斧・鋤先・土師器
3	石森古墳	仙北郡六郷町六郷東根字中村	円	台地	蕨手刀
4	管崎古墳	由利郡象潟町大砂川	壊滅		
5	井岡古墳	由利郡西目町西目井岡客殿森		台地	子持勾玉
6	山田古墳	本荘市山田		山麓	
7	道川古墳	由利郡岩城町道川		海岸	直刀
8	小阿地古墳群	秋田市四ッ小屋小阿地字坂の下	円	台地	蕨手刀・直刀・八花鏡須恵器・玉類
9	新屋浜古墳	秋田市新屋雄物川河川敷	壊滅		木棺・瓦
10	蛭根古墳	秋田市寺内字蛭根	円	台地	
11	根笹山古墳	秋田市寺内字神屋敷	円	台地	
12	空素沼古墳	秋田市寺内空素沼	円	台地	
13	小林Ⅱ古墳	秋田市上新城小林			
14	久保台古墳	秋田市太平八田字久保台	円	台地	蕨手刀・直刀・須恵器
15	岩野山古墳群	南秋田郡五城目町上樋口字樽沢	円	台地	玉類・刀子・蕨手刀太刀・土師器
16	えぞが台古墳	南秋田郡若美町鵜ノ木字えぞが台112		台地	蕨手刀
17	高田古墳	鹿角市十和田毛馬内字高田			
18	曲谷地Ａ古墳	鹿角市十和田曲谷地			
19	曲谷地Ｂ古墳	鹿角市十和田曲谷地			
20	枯草坂古墳	鹿角市十和田錦木字枯草坂	円	台地	玉類・太刀・金具直刀・鉄鏃
21	申ヶ野古墳	鹿角市十和田錦木字申ヶ野	円	台地	
22	室田古墳	鹿角市十和田錦木字室田	円	平地	玉類
23	三光塚古墳	鹿角市尾去沢字東在家	円	平地	玉類
24	中野古墳	北秋田郡比内町中野		台地	土師器



第３図　蝦夷塚古墳群の古墳分布状況図

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

蝦夷塚古墳群の立地する地域は、昭和30年頃の耕地整理前までは水の便が悪く水田には適さないため一部畑地として利用されたものの、ほとんど萱や雑木が繁茂する荒地であったらしい。この中に墳丘と考えられる小山が点在していたと言われるが、現在は水田および畑地となっている。調査対象となった地区は水田跡の平坦地であり、南北に走る農道によって分断されている。この西側に１号墳・２号墳・農道にかかる４号墳・ＳＫ01土壙・ＳＫ02土壙・ＳＫ04土壙・ＳＤ01溝・ＳＤ04溝が位置し、東側に３号墳・13号墳・ＳＫ03土壙・ＳＤ06溝が位置している。なお、調査区の表土は全域にわたってかつての耕地整理などによって攪乱を受けており、農道西側調査区においては、ほとんど地山面まで攪乱がおよんでいた。調査区の土層は50ラインに入れた東西トレンチの北壁の土層観察から以下の通り分けられた。

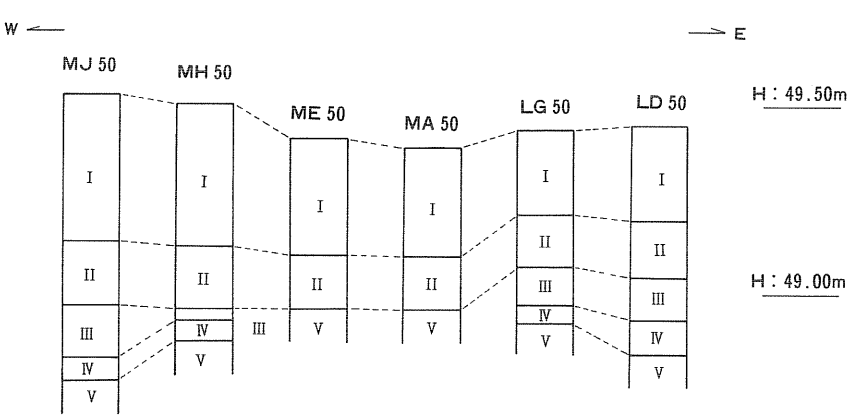
第Ｉ層　黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{2}$）　盛土整地層である。須恵器片、縄文土器片が若干混入している。

第II層　黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{2}$）　旧水田の耕作土である。縄文土器片、須恵器片、土師器片が少量混入している。

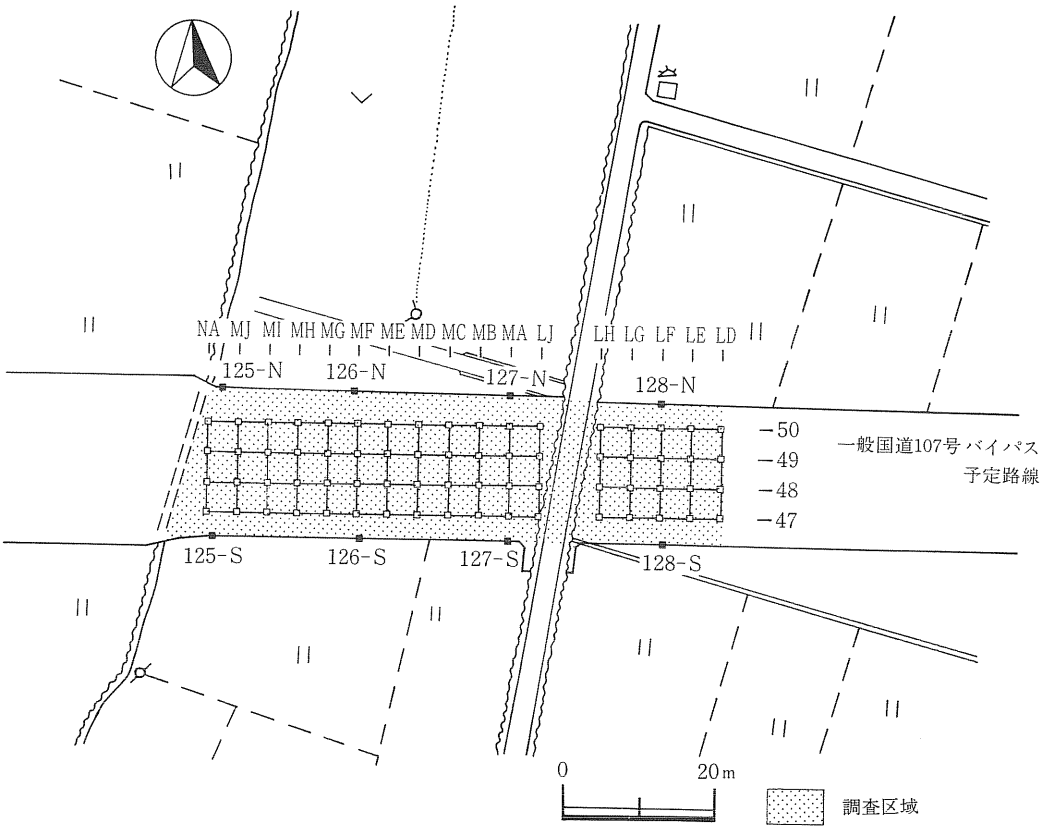
第III層　黒色土（10ＹＲ$^{2}/_{1}$）　炭化物、浅黄色土粒子少量と縄文土器片、須恵器片、土師器片が少量混入している。

第IV層　褐灰色土（10ＹＲ$^{4}/_{1}$）～灰黄褐色土（10ＹＲ$^{4}/_{2}$）　粘質土の地山漸移層である。

第Ｖ層　浅黄色土（10ＹＲ$^{7}/_{3}$）　粘質土でよく締っている地山である。



第４図　遺跡土層柱状図



第５図　グリッド配置図

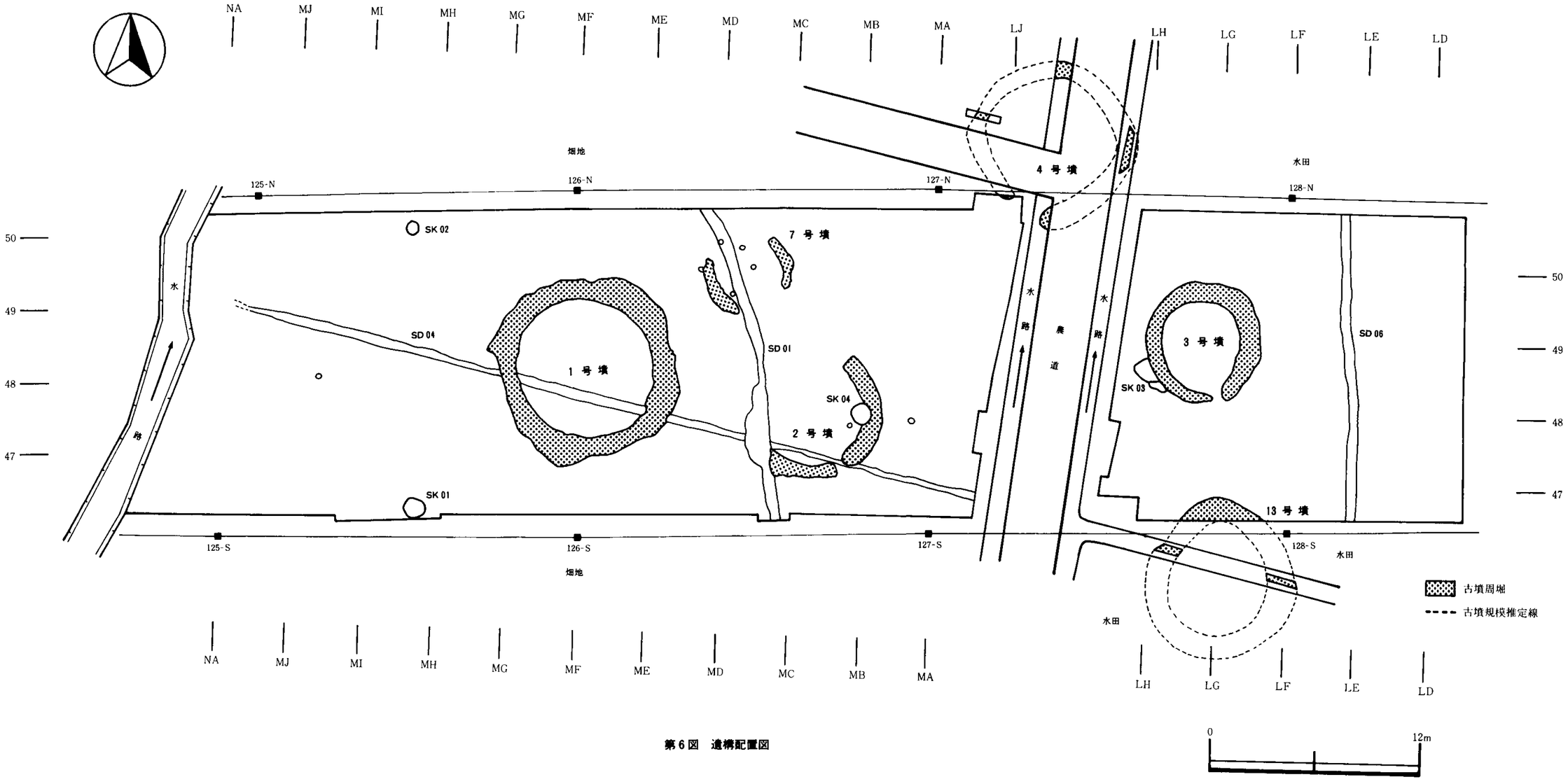
第２節　調査の方法

秋田県平鹿土木事務所道路課が国道107号バイパス建設のために設定した路線幅杭仮称127-Nと127-Sを結ぶ直線を基準線として、この線上にグリッド原点ＭＡ50を取り、この点と直交する線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。なお127-Nと127-Sを結ぶ基準線は磁北から東へ 0° 25′ 39″ 偏しているが、一応これを南北ラインとし、この線上のグリッド原点ＭＡ50と直交する線を東西ラインとした。また南北ラインには２桁の算用数字、東西ラインにはアルファベット２文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構等の実測は、各グリッド隅の杭を利用して簡易遣り方測量で行い、縮尺は20分の１とした。また４号墳・13号墳の一部や農道・水路等は平板測量で行い、縮尺は100分の１とした。なお20分の１で実測した遺構平面図と100分の１で実測した遺構・農道・水路などの平面図から200分の１の遺構配置図など必要な図面を作成した。

第３節　調査の経過

９月２日、発掘調査に先立って、調査区内の草刈り作業とプレハブの設置および発掘器材の搬入を行う。この間造山部落老人憩いの家で発掘調査説明会を行った。３日、昨日に引き続き調査区内の草刈作業を行うと共に調査区内に捨てられていた西瓜約100個の除去作業を実施した。次に土捨て場とした調査区外東側を隔てる排水路に木橋を設置した。４日、発掘前の調査区全景を撮影したあと、グリッド抗打設と昭和58年度範囲確認調査を基に調査区東端部から西へ掘り下げを開始した。調査区を南北に横切って走る農道に沿って排水路があり、キャタトラ（排土運搬用）移動の際にこの排水路を越えて行くため、平鹿土木事務所道路課から橋状に鉄板を設置していただいた。５日、３号墳周堀とＳＤ06溝の平面プランを検出した。６日、土層観察のため調査区北東隅から西へ50ラインに沿って幅50cmのトレンチを掘り始める。７日、昨晩から今朝にかけて降った雨で調査区に水がかなり溜っており排水作業を行いながら調査を進めていく。９日、農道の西側調査区内の掘り下げを開始する。またこの地区の土捨て場とした調査区外西側を隔てる排水路に木橋を設置した。13日、雨のため遅れていたグリッド抗打設作業を終了した。この日、北海道大学林謙作助教授が来跡、調査方法について御教示いただいた。17日、７号墳周堀とＳＤ01溝の平面プランおよびピット１～５を検出した。19日、２号墳周堀とＳＤ04溝の平面プランおよびピット６～８を検出した。20日、掘り下げを進めていくが出土遺物の量は少ない。21日、１号墳周堀の平面プランを検出した。25日、範囲確認調査時の古墳周堀確認面までの掘り下げを終えて、調査区の精査と３号墳から順に調査を開始する。26日、ＳＫ01土壙の平面プランとピット９を検出した。27日、あらたに13号墳周堀の平面プランを検出した。28日、土層図作成を終了し、50ラインに沿って残した土層観察用ベルトを除去した。30日、ＬＪ50グリッド北壁下と調査区内農道西側の排水路でわずかであるが４号墳周堀の平面プランを検出した。この頃から雨の日が多くなり作業に支障をきたしてきた。10月１日、ベルト除去をほぼ終了し精査を行ったところ、ＳＫ02土壙の平面プランを検出した。３日、ＳＫ03土壙の平面プランを検出した。３、４日の両日と９日に福地小学校の先生と児童一行が見学のため来跡した。５日、大森町郷土史研究会一行が来跡した。７日、ＳＫ04土壙の平面プランを検出した。８日、雄物川町文化財保護審議会が来跡した。11日、各遺構の掘り下げと精査をほぼ終了したが、出土遺物の量は全般に少ない。14日、各遺構その他の細部実測および写真撮影を終了した。この日秋田大学新野直吉教授が来跡し、調査について御教示いただいた。また雄物川町富田弘二町長が来跡した。15日、１号墳の補足調査をし発掘後の調査区全景を撮影したあと、発掘器材を埋文センターへ送り、プレハブの撤去を行い本調査を終了した。


NA
MJ
MI
MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LJ
LH
LG
LF
LE
LD
畑地
水田
125-N
126-N
127-N
128-N
125-S
126-S
127-S
128-S
50
49
48
47
SK 02
SK 01
SK 03
SK 04
SD 01
SD 04
SD 06
1 号 墳
2 号 墳
3 号 墳
4 号 墳
7 号 墳
13 号 墳
水
路
農
道
古墳周堀
古墳規模推定線
0
12m

第6図　遺構配置図

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

１．古　　墳

本調査において、古墳６基とその内外から土師器、須恵器、鉄製品を検出した。以下これについて述べる。

１号墳（第６・７図、第６～８図版）

位置：ＭＤ47～49、ＭＥ47～49、ＭＦ47～49、ＭＧ48・49グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

周堀：地山面で検出された。平面形はほぼ円形を呈している。規模は内周の直径7.20～7.80ｍ、外周の直径10.00～10.80ｍ、上面幅0.88～1.86ｍ、底面幅0.15～1.10ｍ、深さ0.15～0.73ｍである。底面は凹凸している。周壁面は内周壁が急傾斜で立ち上がっているが、外周壁は内周壁よりは緩い傾斜で立ち上がっている。

主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：ＳＤ04溝に切られている。

出土遺物：周堀内埋土中より、須恵器片、完形の土師器杯１個（第８図５）、復原により完形となった底部穿孔の土師器甕１個（第９図12）および土師器片など少量と、刀子片３点、鉄鏃片２点、石鏃２点が出土したが図示できるものは少なかった。

その他：周堀内北部の埋土上面から深さ0.15ｍの所で、範囲が0.95×0.52ｍで、厚さ0.03ｍの焼土を検出した。

２号墳（第６・12図、第９～11図版）

位置：ＭＡ47・48、ＭＢ46～47、ＭＣ46～48グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

周堀：地山面で検出された。平面形は南東部と北部が切れ、「ハ」の字に近い形を呈しているが、本来は南東部のみが開口する馬蹄形の周堀であったと思われる。規模は内周の直径約5.90ｍ、外周の直径約8.00ｍ、上面幅0.60～1.06ｍ、底面幅0.34～0.77ｍ、深さ0.20～0.28ｍである。底面はほぼ平坦である。周壁面は内外周壁面とも急傾斜で立ち上がっている。なお切れ幅は南東部約0.46ｍ、北部約5.00ｍである。

主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：ＳＤ01・04溝・ＳＫ04土壙に切られている。

出土遺物：周堀内埋土中より須恵器片、完形で底部穿孔の土師器杯１個（第13図１）、復原によりほぼ完形となった土師器甕１個（第13図３）および土師器片などが少量出土したが、図示できるものは少なかった。

３号墳（第６・15図、第12・13図版）

位置：ＬＦ48・49、ＬＧ48・49、ＬＨ48・49グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

周堀：第Ⅲ層上面で検出された。平面形は南東部が開口し馬蹄形を呈している。規模は内周の直径4.46～5.05ｍ、外周の直径6.40～6.80ｍ、上面幅0.50～1.35ｍ、底面幅0.46～1.00ｍ、深さ0.10～0.52ｍである。底面は凹凸が激しい。周壁面は内周壁がほぼ緩やかに立ち上がっているのに対し、外周壁は急傾斜で立ち上がっている。開口幅は約0.58ｍである。

主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：ＳＫ03土壙を切っている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

４号墳（第６図）

位置：ＬＨ50・ＬＩ50・ＬＪ50グリッド。調査区外北側の農道および畑地。

墳丘部：大部分が調査区外北側の農道および畑地に位置しているため、墳丘残存の有無を確認することはできなかった。

周堀：ＬＩ50・ＬＪ50グリッド北壁下とＬＩ50グリッドの排水路内の地山面でわずかであるが検出された。昭和58年度範囲確認調査を基に復原すれば、ほぼ円形を呈しているものと思われ、規模は内周の直径6.50～7.40ｍ、外周の直径8.50～9.00ｍ、上面幅0.80～1.40ｍであると推定される。北西部の切れ幅は約2.03ｍである。

主体部：墳丘部と同様に確認することはできなかった。

遺構の切り合い関係：なし

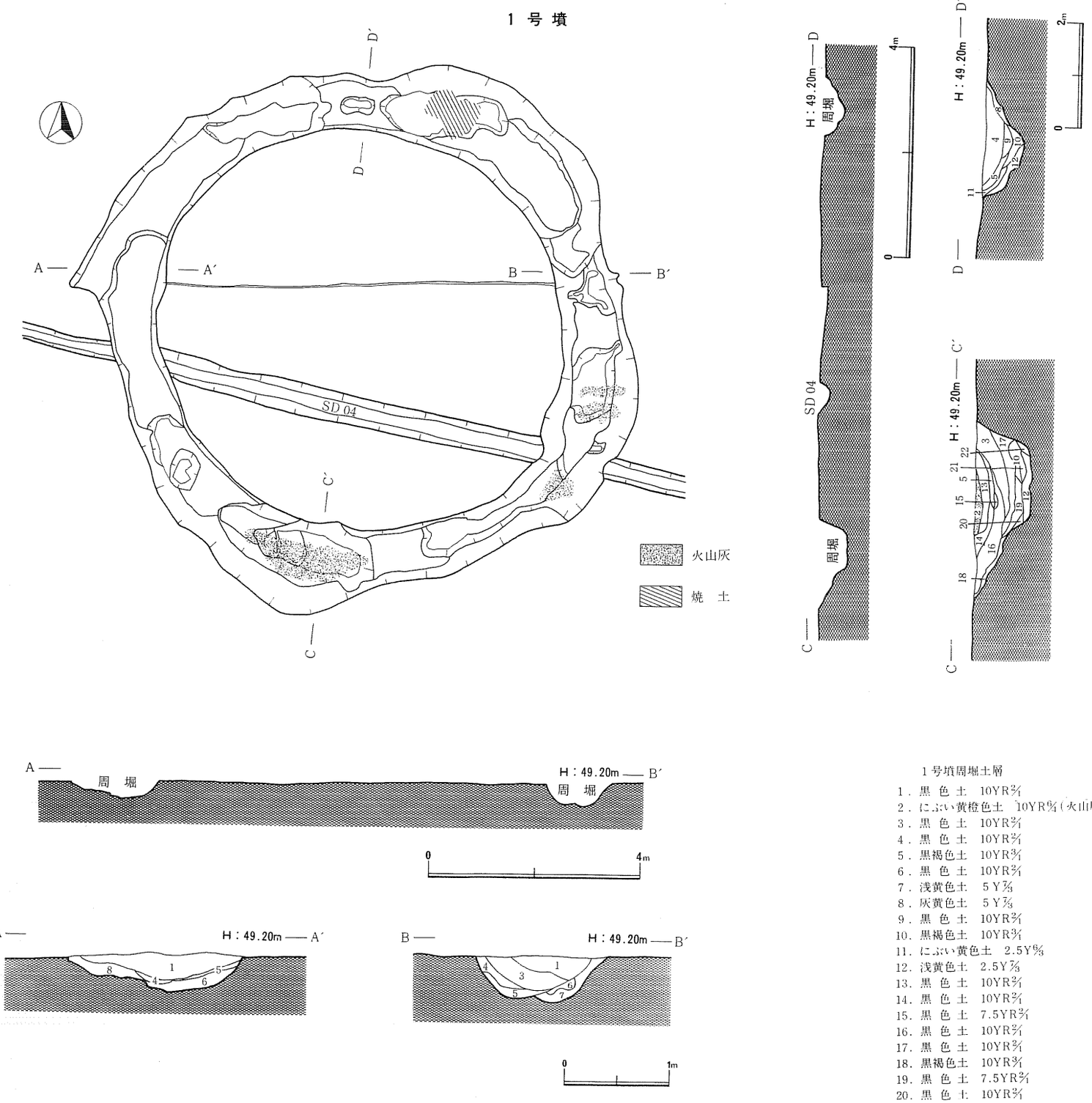
出土遺物：遺物は出土しなかった。

７号墳（第６・16図、第14図版）

位置：ＭＣ49・50、ＭＤ49グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

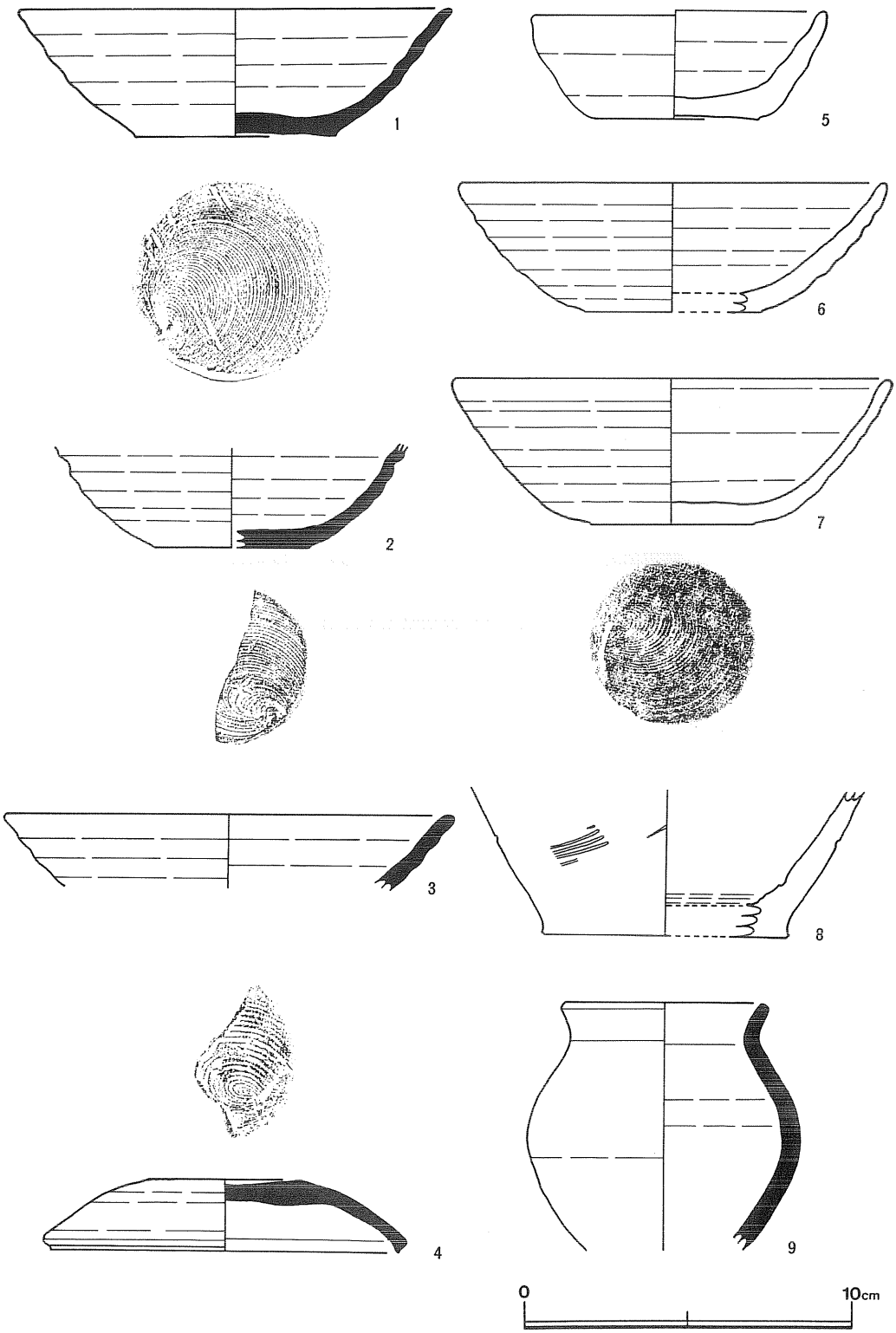
周堀：地山面で検出された。平面形は南部と北部が切れ、「い」の字に近い形を呈している。規模は内周の直径約3.56ｍ、外周の直径約5.04ｍ、上面幅0.44～0.82ｍ、底面幅0.32～0.58ｍ、深さ0.10～0.21ｍである。底面はほぼ平坦である。周壁面は内外周壁とも急傾斜で立ち上がっている。なお切れ幅は南部約2.80ｍ、北部約3.70ｍである。



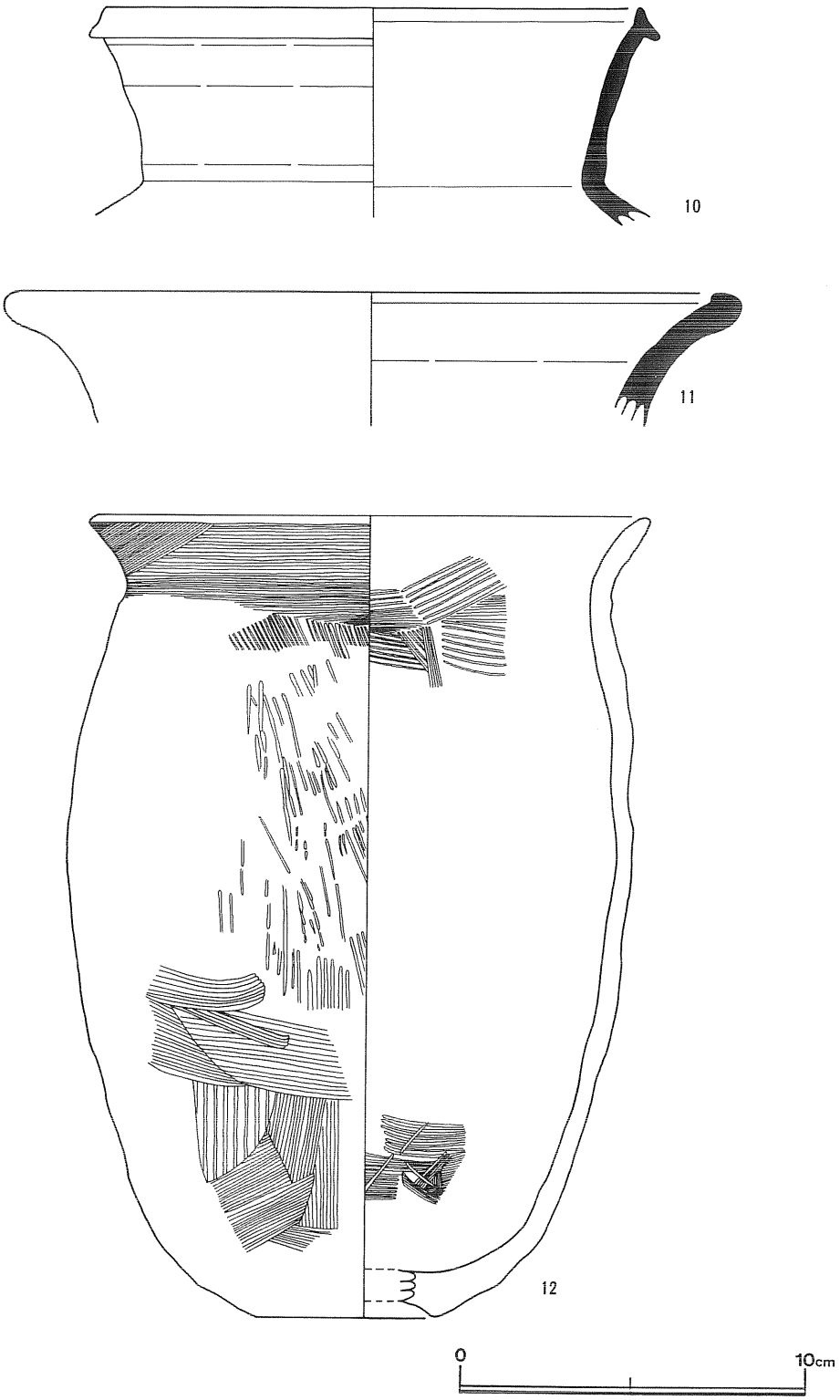
1号墳周堀土層

1．黒 色 土　10YR2/1
2．にぶい黄橙色土　10YR6/4（火山灰）
3．黒 色 土　10YR2/1
4．黒 色 土　10YR2/1
5．黒褐色土　10YR3/1
6．黒 色 土　10YR2/1
7．浅黄色土　5Y7/3
8．灰黄色土　5Y7/3
9．黒 色 土　10YR2/1
10．黒褐色土　10YR3/1
11．にぶい黄色土　2.5Y6/3
12．浅黄色土　2.5Y7/4
13．黒 色 土　10YR2/1
14．黒 色 土　10YR2/1
15．黒 色 土　7.5YR2/1
16．黒 色 土　10YR2/1
17．黒 色 土　10YR2/1
18．黒褐色土　10YR3/1
19．黒 色 土　7.5YR2/1
20．黒 色 土　10YR2/1
21．にぶい黄色土　2.5Y6/4
22．浅黄色土　5Y7/3

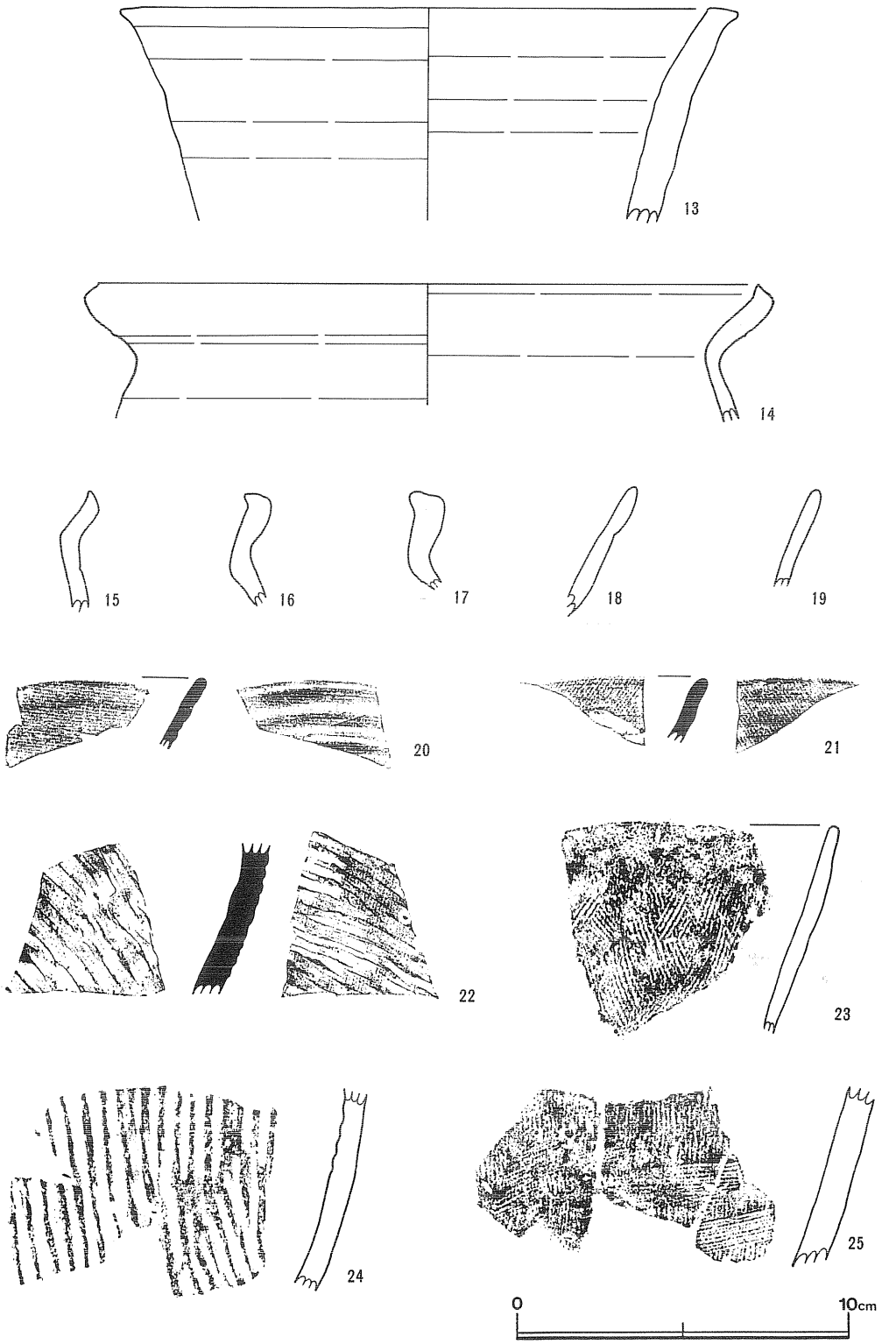
第7図　1号墳実測図



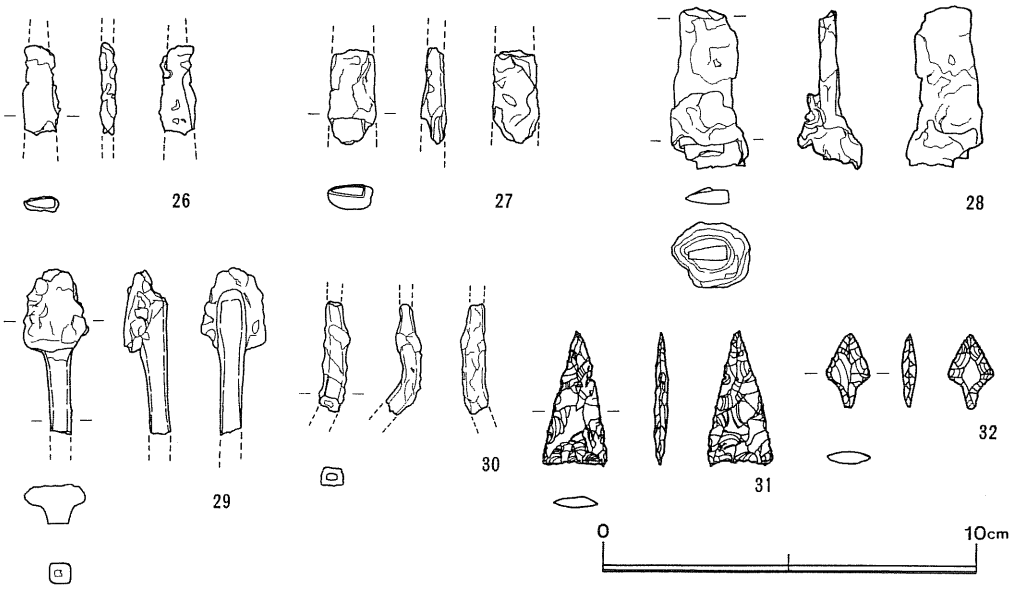
第８図　１号墳出土土器(1)



第９図　１号墳出土土器(2)



第10図　１号墳出土土器(3)

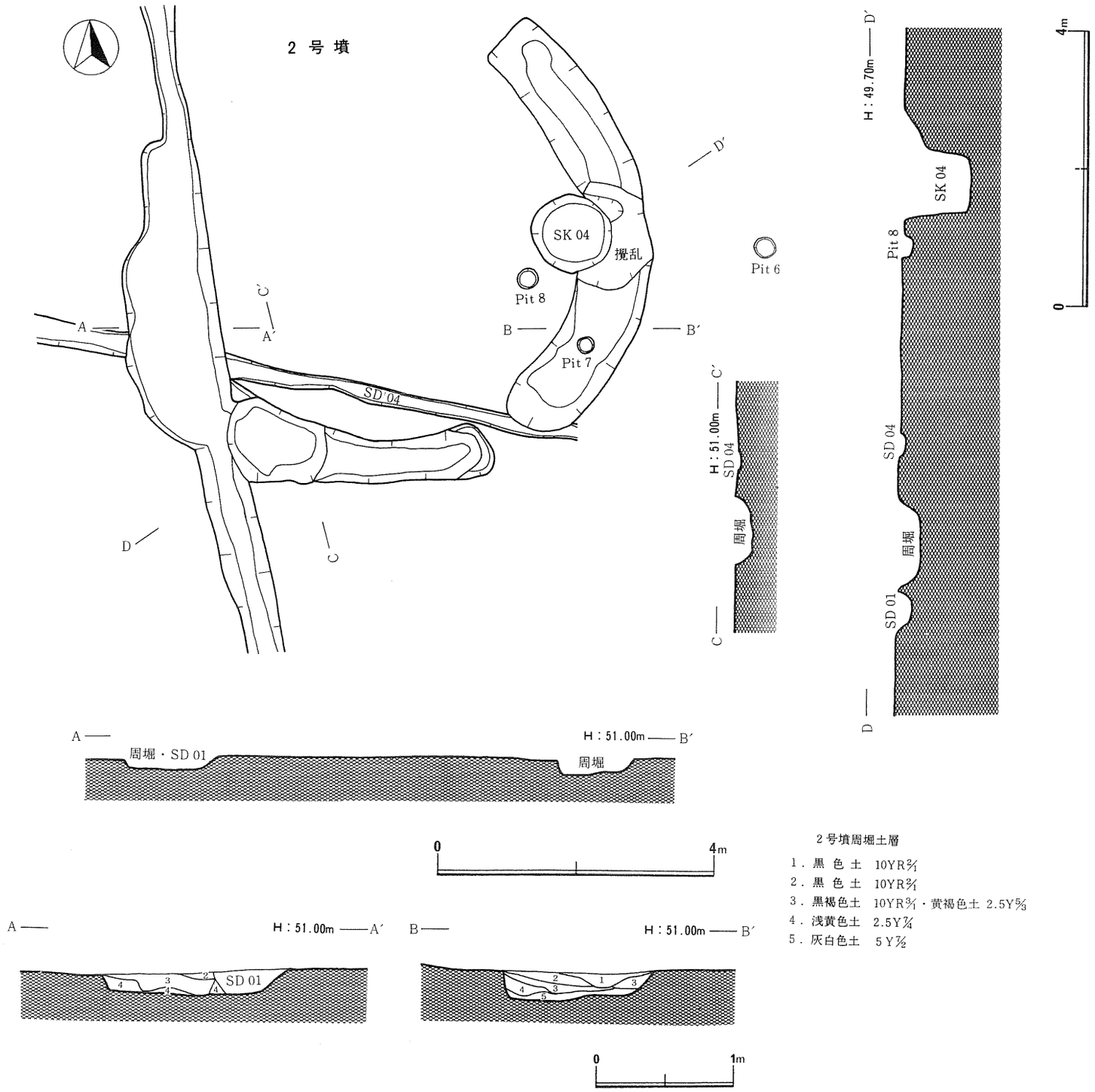


第11図　１号墳出土遺物(4)

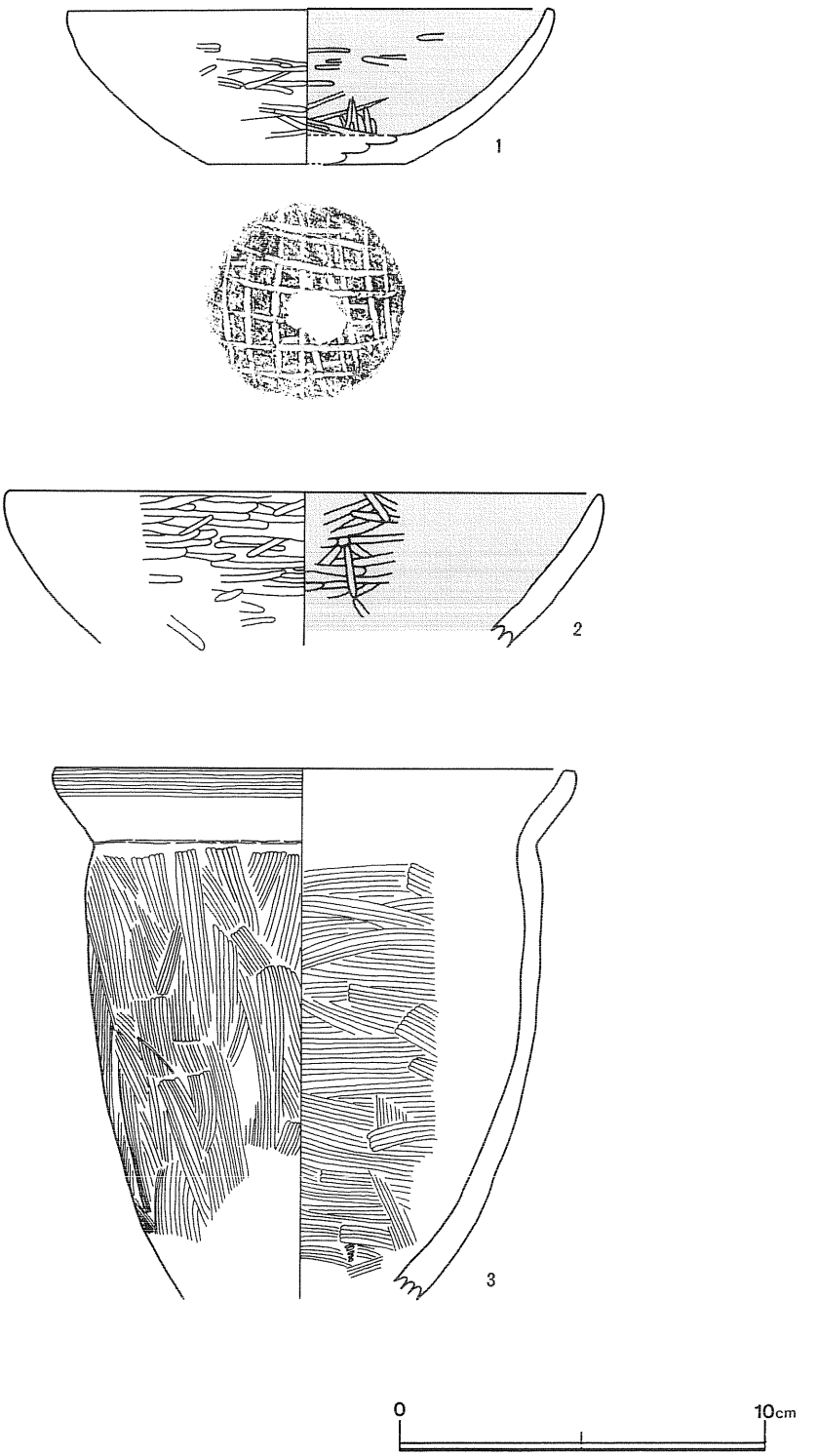
第３表　１号墳出土遺物観察表

挿図番号	図版番号	器種・器形	部位	外面 調整	外面 色調	内面 調整	内面 色調	成形	胎土	焼成	備考
1	16－1	須恵器杯	口縁部から底部	ナデ	2.5Y7/1灰黄	ナデ	2.5Y7/3浅黄	ロクロ	砂粒	良好	回転糸切り(右)
2	16－2	須恵器杯	胴部から底部	ナデ	7.5Y7/1灰白	ナデ	7.5Y7/1灰白	ロクロ	砂粒	良好	回転糸切り(右)
3		須恵器杯	口縁部	ナデ	7.5Y6/1灰	ナデ	7.5Y6/1灰	ロクロ	砂粒	良好	
4	16－3	須恵器蓋	天井部から口縁部	ナデ	10Y7/1灰白	ナデ	10Y7/1灰白	ロクロ	砂粒	良好	回転糸切り(右)
5	16－5	土師器杯	完形	ナデ	7.5YR5/1灰褐	ナデ	10YR8/3浅黄橙	ロクロ	砂粒	普通	
6	16－7	土師器杯	口縁部から底部	ナデ	2.5Y8/1灰白	ナデ	2.5Y8/1灰白	ロクロ	砂粒	良好	
7	16－6	土師器杯	口縁部から底部	ナデ	2.5Y8/2灰白	ナデ	2.5Y8/3淡黄	ロクロ	砂粒	良好	回転糸切り(右)
8	16－8	土師器甕	胴部から底部	ハケ目	7.5YR8/4浅黄橙	ハケ目	10YR8/1灰白	非ロクロ	砂粒	良好	
9	16－4	須恵器壺	口縁部から胴部	ナデ	7.5Y5/1灰	ナデ	7.5Y6/1灰	ロクロ	砂粒	良好	自然釉がみられる
10		須恵器甕	口縁部から頸部	ナデ	5Y7/1灰	ナデ	2.5Y6/1黄灰	ロクロ	砂粒	良好	
11	17－11	須恵器甕	口縁部	ナデ	N5/0灰	ナデ	N6/0灰	ロクロ	砂粒	良好	
12	17－9	土師器甕	完形	ヘラナデ	10YR8/2灰白	ナデ	10YR8/3浅黄橙	非ロクロ	砂粒	普通	底部穿孔
13		土師器	口縁部	ナデ	10YR8/3にぶい黄橙	ナデ	10YR8/2灰白	ロクロ	砂粒	良好	
14	17－10	土師器甕	口縁部	ナデ	10YR8/3浅黄橙	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	ロクロ	砂粒	良好	
15		土師器甕	口縁部	磨滅のため不明	10YR8/4浅黄橙	ヘラナデ	10YR8/4浅黄橙	ロクロ	砂粒	普通	
16		土師器甕	口縁部	磨滅のため不明	10YR8/2灰白	磨滅のため不明	10YR7/2にぶい黄橙	ロクロ	砂粒	普通	
17		土師器甕	口縁部	磨滅のため不明	2.5Y8/3淡黄	ヘラナデ	10YR8/2灰白	ロクロ	砂粒	普通	
18		土師器杯	口縁部	ヘラミガキ	10YR8/2灰白	ヘラミガキ	7.5YR1.7/1黒	非ロクロ	砂粒	良好	内面黒色処理
19		土師器杯	口縁部	ヘラミガキ	7.5YR1.7/1黒	ヘラミガキ	7.5YR1.7/1黒	非ロクロ	砂粒	良好	内面黒色処理
20		須恵器杯	口縁部	ナデ	2.5Y6/1黄灰	ナデ	2.5Y6/1黄灰	ロクロ	砂粒	良好	
21		須恵器杯	口縁部	ナデ	5Y5/1灰	ナデ	5Y5/1灰	ロクロ	砂粒	良好	
22		須恵器甕	胴部	タタキ目	10Y5/1灰	タタキ目	10YR7/1灰白		砂粒	良好	
23		土師器甕	口縁部	ハケ目	7.5YR7/3にぶい橙	ハケ目	10YR8/3浅黄橙	非ロクロ	砂粒	不良	
24		土師器甕	胴部	タタキ目	7.5YR5/3にぶい褐	タタキ目	10YR8/2灰白		砂粒	不良	
25		土師器甕	胴部	ハケ目	7.5YR8/6浅黄橙	ハケ目	7.5YR8/4浅黄橙	非ロクロ	砂粒	不良	

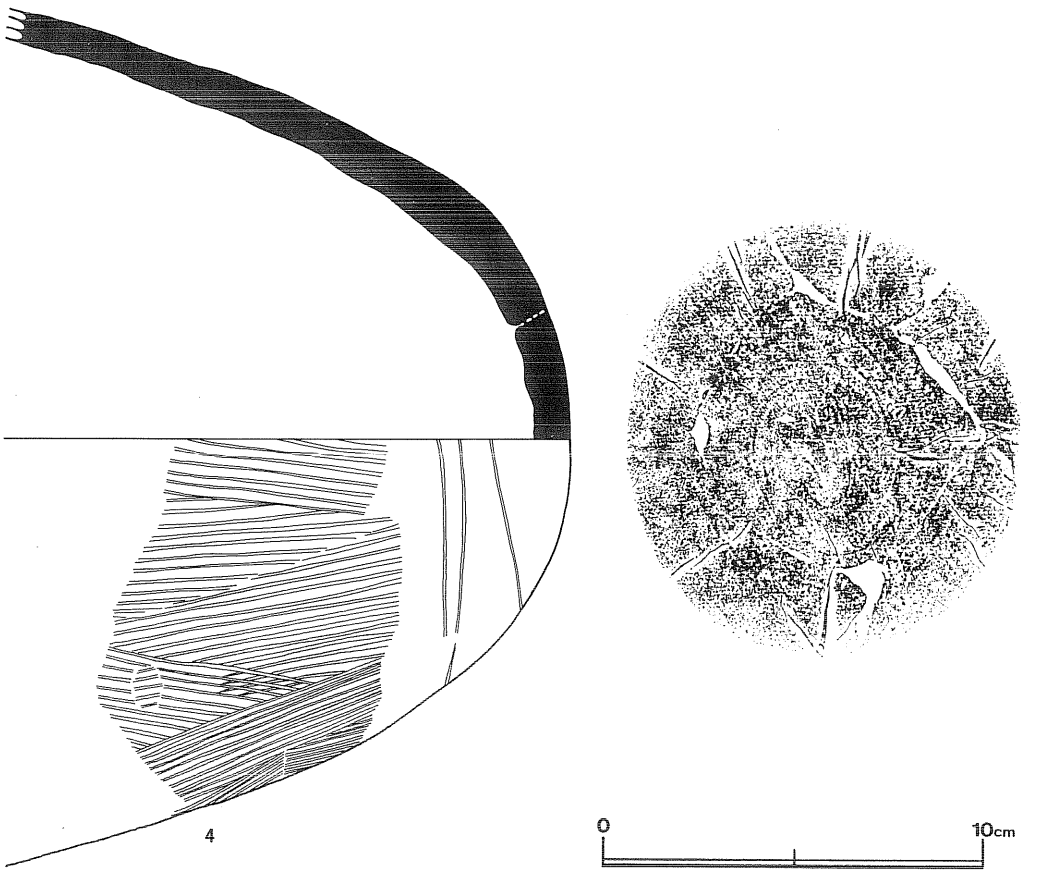
挿図番号	図版番号	器種・器形	部位	大きさ（単位：mm） 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
26	19－1	刀子	刀部破片	24.0	10.0	4.0	1.0	周堀確認面からの出土である
27	19－2	刀子	刀部破片	25.5	13.0	6.0	2.3	〃
28	19－3	刀子	刀部破片	43.5	20.0	5.0	6.5	〃
29	19－6	鉄鏃	基部破片	44.5	16.0	10.0	4.9	〃
30	19－7	鉄鏃	基部破片	30.0	7.0	5.0	1.9	〃
31	19－4	石鏃	完形	35.5	17.5	2.0～3.5	1.8	〃
32	19－5	石鏃	完形	20.0	11.5	3.5	0.5	〃


2 号 墳
SK 04
撹乱
Pit 8
Pit 7
Pit 6
SD 04
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
H：49.70m
H：51.00m
周堀
SD 01
周堀・SD 01
0
4m
1m
2 号墳周堀土層
1．黒 色 土 10YR2/1
2．黒 色 土 10YR2/1
3．黒褐色土 10YR3/1・黄褐色土 2.5Y5/3
4．浅黄色土 2.5Y7/4
5．灰白色土 5Y7/2

第12図　2号墳実測図



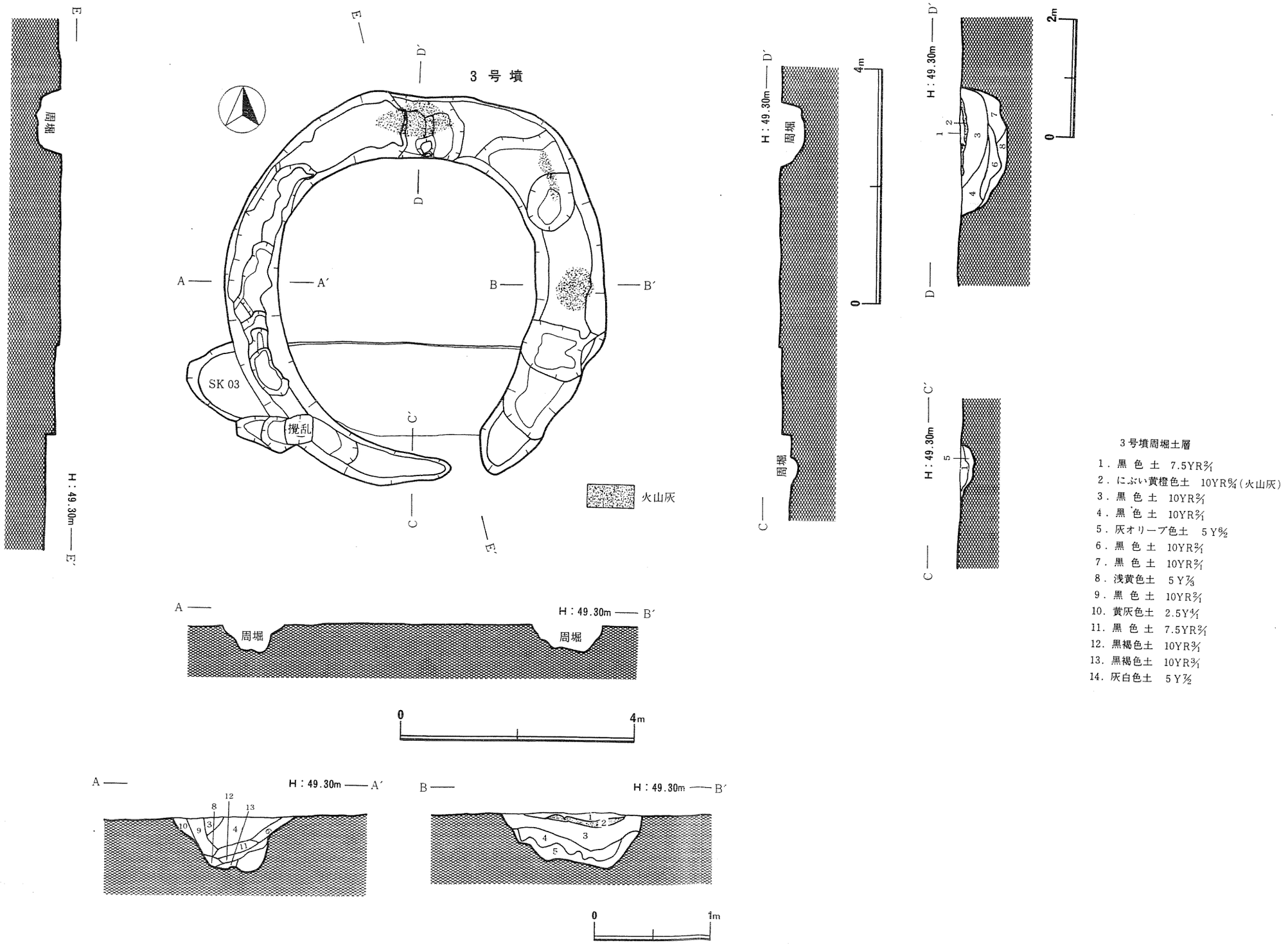
第13図　２号墳出土土器(1)



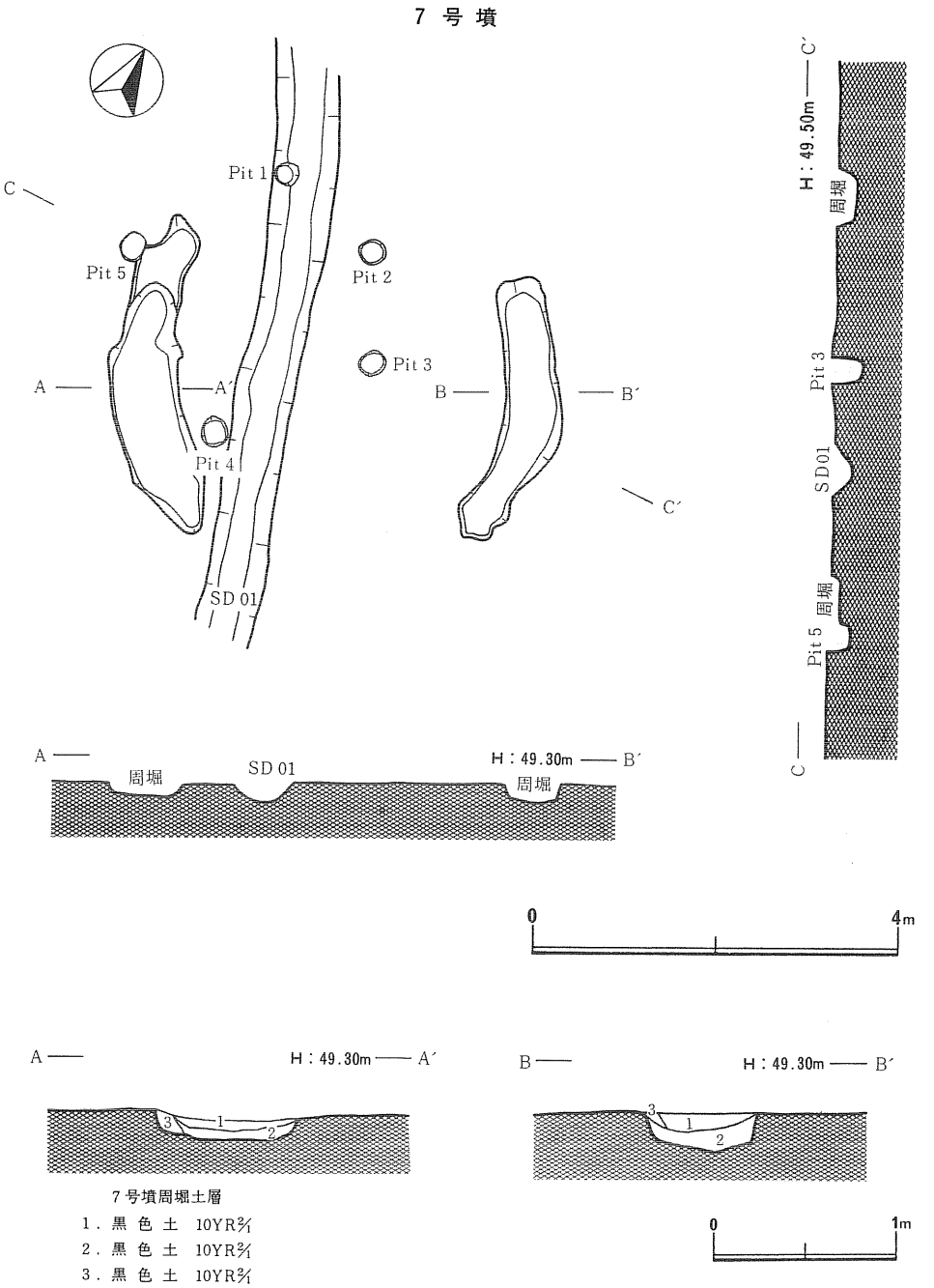
第14図　２号墳出土土器(2)

第４表　２号墳出土土器観察表

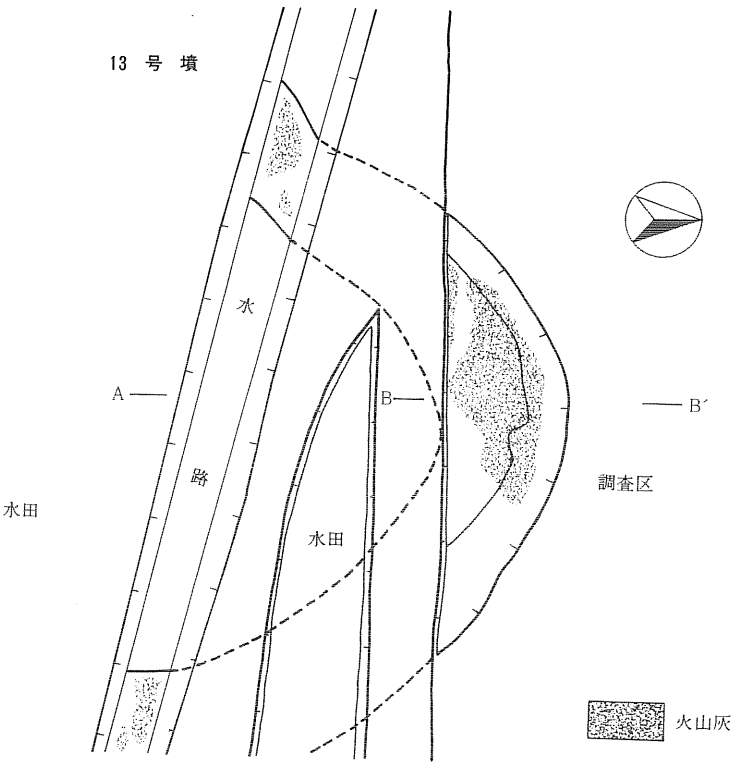
挿図番号	図版番号	器種器形	部位	外面 調整	外面 色調	内面 調整	内面 色調	成形	胎土	焼成	備考
1	18－1	土師器杯	完形	ヘラミガキ	10YR 8/3 浅黄橙	ヘラミガキ	N 1.5/0 黒	非ロクロ	砂粒	良好	底部穿孔 内面黒色処理
2		土師器杯	口縁部	ヘラミガキ	10YR 8/3 浅黄橙	ヘラミガキ	10YR 1.7/1 黒	非ロクロ	砂粒	良好	内面黒色処理
3	18－2	土師器甕	口縁部から胴部下端	ハケ目	10YR 8/3 浅黄橙	ハケ目	10YR 8/3 浅黄橙	非ロクロ	砂粒	普通	
4	18－3	須恵器横瓶	胴部	タタキ目	10BG 3/1 青黒	アテ具痕	10BG 3/1 暗青灰		砂粒	良好	

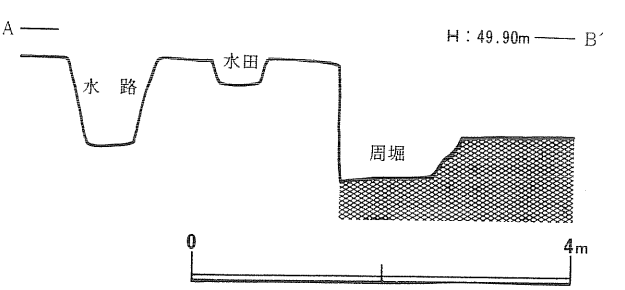

3 号 墳
SK 03
攪乱
火山灰
周堀
H：49.30m
0
4m
2m
1m
3号墳周堀土層
1．黒 色 土 7.5YR2/1
2．にぶい黄橙色土 10YR6/4（火山灰）
3．黒 色 土 10YR2/1
4．黒 色 土 10YR2/1
5．灰オリーブ色土 5Y6/2
6．黒 色 土 10YR2/1
7．黒 色 土 10YR2/1
8．浅黄色土 5Y7/3
9．黒 色 土 10YR2/1
10．黄灰色土 2.5Y4/1
11．黒 色 土 7.5YR2/1
12．黒褐色土 10YR3/1
13．黒褐色土 10YR3/1
14．灰白色土 5Y7/2

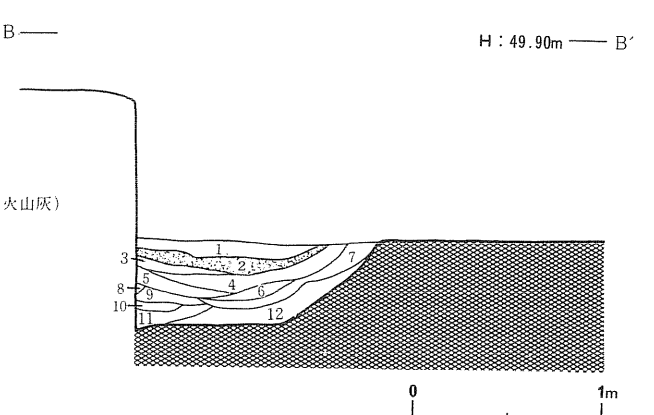
第15図　3号墳実測図


7 号 墳
Pit 1
Pit 2
Pit 3
Pit 4
Pit 5
SD 01
A
A′
B
B′
C
C′
H：49.50m
周堀
H：49.30m
0
4m
1m
7号墳周堀土層
1．黒 色 土　10YR2/1
2．黒 色 土　10YR2/1
3．黒 色 土　10YR2/1

第16図　７号墳実測図







13号墳周堀土層

1．黒 色 土　10YR1.7/1
2．にぶい黄橙色土　10YR6/4（火山灰）
3．黒 色 土　10YR2/1
4．黒 色 土　10YR2/1
5．黒 色 土　10YR2/1
6．黒 色 土　10YR1.7/1
7．黒褐色土　10YR3/1
8．黄灰色土　2.5YR5/1
9．黒褐色土　10YR3/1
10．黒 色 土　7.5Y2/1
11．にぶい黄色土　2.5Y6/3
12．浅黄色土　5Y7/3

第17図　13号墳実測図

主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：ＳＤ01溝に切られ、ピット１～５を切っている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

13号墳（第６・17図、第15図版）

位置：ＬＦ46・ＬＧ46グリッド。調査区外南側の水田。

墳丘部：大部分が調査区外南側の水田に位置しているため、墳丘残存の有無を確認することはできなかった。

周堀：ＬＦ46・ＬＧ46グリッドの南壁下の地山面で検出された。検出時は他の遺構と考えたが、調査区外南側の排水路を調査したところ、5.20ｍの間隔をもって東部と西部に火山灰を混入する周堀を地山面で検出した。このことから平面形はほぼ円形を呈するものと思われ、規模は内周の直径5.20ｍ、外周の直径8.00ｍ、上面幅1.40ｍであると推定される。深さは0.38～0.51ｍである。底面はほぼ平坦である。周壁面は外周壁が急傾斜で立ち上がっている。内周壁は検出することができなかった。

主体部：墳丘部と同様に確認することはできなかった。

遺構の切り合い関係：なし

出土遺物：遺物は出土しなかった。

２．土　　壙

本調査において、土壙４基を検出した。

ＳＫ01土壙（第18図）

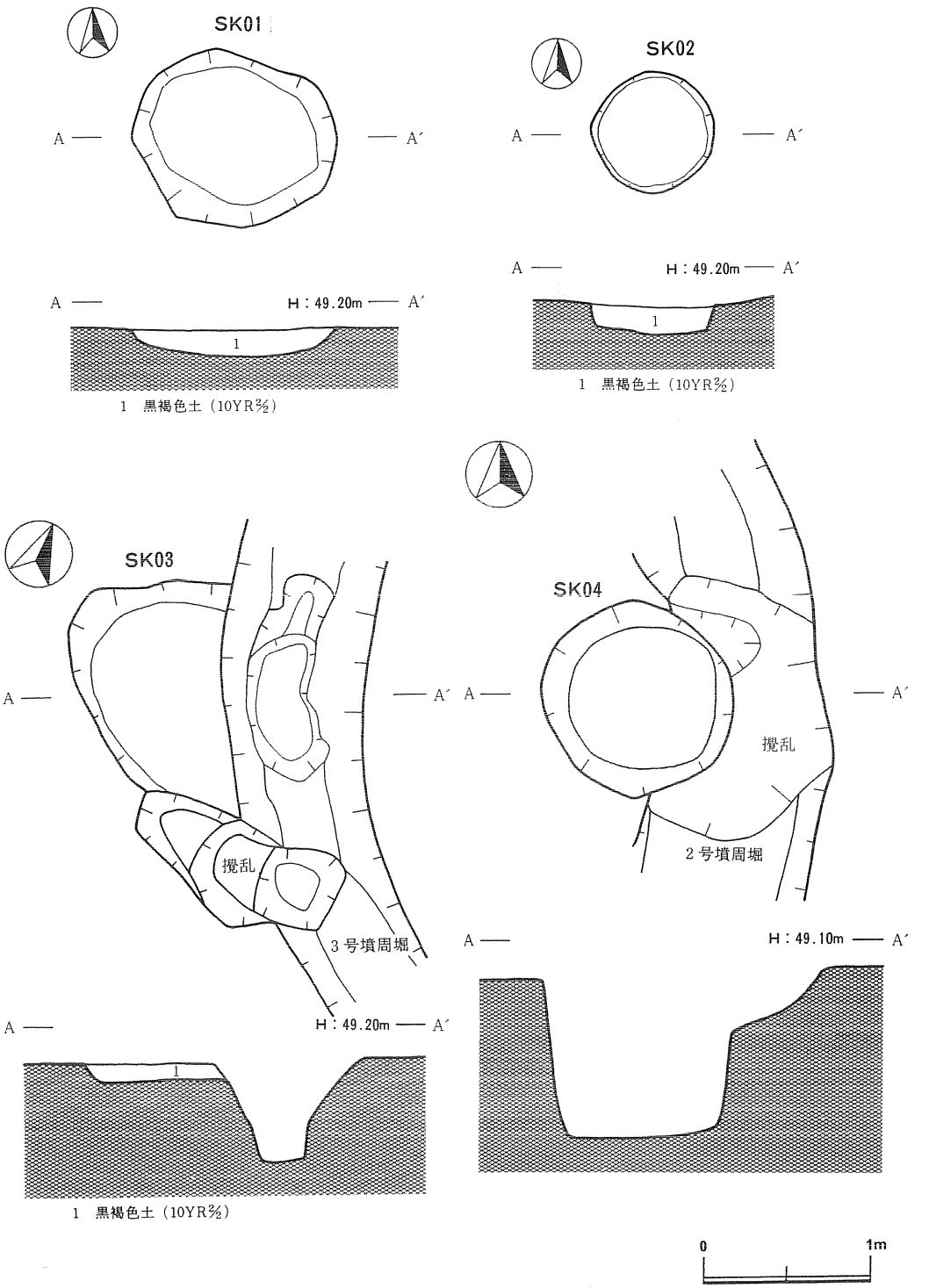
ＭＨ46グリッド内の地山面で検出された遺構で、平面形は楕円形を呈し、長軸1.28ｍ、短軸1.06ｍ、深さ0.17ｍである。底面は丸みを帯び、壁面は緩やかな傾斜で立ち上がっている。埋土は浅黄色土粒子、炭化物を含む黒褐色土である。遺物は縄文土器片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＫ02土壙（第18図）

ＭＨ50グリッド内の地山面で検出された遺構で、平面形は円形を呈し、直径0.74ｍ、深さ0.19ｍである。底面はほぼ平坦であり、壁面は垂直に近く立ち上がっている。埋土は浅黄色土粒子、炭化物を含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ03土壙（第18図）

ＬＧ48・ＬＨ48グリッドにまたがって、第Ⅲ層で検出された遺構で、東部を３号墳周堀に切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.35ｍ、短軸0.93ｍ、深さ0.10ｍである。底面はほぼ平坦であり、壁面は急傾斜で立ち上がっている。埋土はにぶい黄橙色土粒子、浅黄色土粒子



第18図　SK01・02・03・04土壙実測図

を含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ04土壙（第18図）

MA47・MB47グリッドにまたがって、地山面で検出された遺構で２号墳周堀を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、長軸1.20ｍ、短軸1.16ｍ、深さ0.94ｍである。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は上部層が黒色土で下部層は黒色土粒子を含むにぶい黄色土である。遺物は出土しなかった。

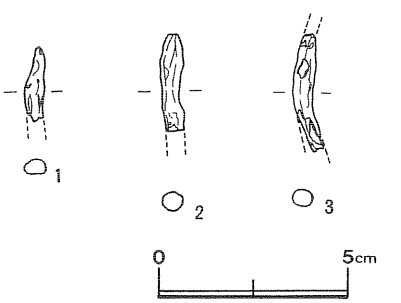
以上、出土遺物からＳＫ01土壙は縄文時代のものと判断できたが、他の土壙については、遺物が出土しなかったため時代を特定することはできなかった。

３．溝　　跡

本調査において、溝跡３条を検出した。

ＳＤ01溝（第６図）

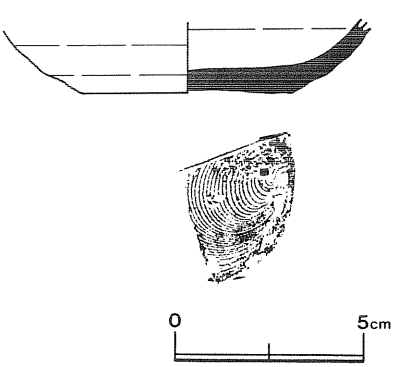
調査区の中央部に位置し、ＳＤ04溝に切られ、２号墳、７号墳、ピット１を切って南北に延びている溝で、長さ 17.90ｍ、溝幅0.37～1.40ｍ、深さ0.15～0.21ｍである。埋土は炭化物、浅黄色土粒子を含む黒褐色土である。遺物は縄文土器片、土師器片と鉄鏃の基部（第19図１～３）の小破片が若干出土したが、鉄鏃片以外に図示できるものはなかった。



第19図　SD01溝跡出土遺物

ＳＤ04溝（第６図）

１号墳、２号墳、ＳＤ01溝を切って、調査区の北西から南西に延びている溝で、長さ 35.50 ｍ、溝幅0.22～0.55ｍ、深さ0.04～0.13ｍである。埋土は炭化物、浅黄色土粒子を含む黒褐色土である。遺物は縄文土器片、須恵器片（第20図）、土師器片が若干出土したが、須恵器片以外に図示できるものはなかった。



第20図　SD04溝跡出土土器

ＳＤ06溝（第６図）

調査区の東部に位置し、南北に延びている溝で、長さ 17.00 ｍ、溝幅0.55～0.58ｍ、深さ0.22ｍである。埋土は浅黄色土ブロックを含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

以上、これらの溝跡は、土地所有者の藤田・佐藤両氏の証言で、ＳＤ01溝は昭和30年頃の耕地整理前まで

あった水路跡であり、ＳＤ04・06溝はつい最近まで使用されていた排水路跡であることがわかった。

４．ピット状遺構

本調査においてピット状遺構を９基検出した。ピット１～５（第16図）までは７号墳、ＳＤ01溝に切られ、これらの内外にあり、ピット６～８（第12図）までは２号墳の内外にある。ピット９はＭＩ48グリッド内で検出された。各々の計測値は、ピット１：直径27cm・深さ32cm、ピット２：直径32cm・深さ21cm、ピット３：直径30cm・深さ29cm、ピット４：直径33cm・深さ15cm、ピット５：直径33cm・深さ25cm、ピット６：直径33cm・深さ17cm、ピット７：直径29cm・深さ12cm、ピット８：直径31cm・深さ10cm、ピット９：直径31cm・深さ21cmであった。また、埋土はピット１～５までは浅黄色土粒子、黄灰色土粒子を含む黒褐色土で、ピット６～９までは浅黄色土粒子を含む黒色土である。全てのピットは、地山面で検出されたもので、遺物は出土しなかった。

以上、遺物が出土しなかったため時代を特定することはできなかった。

第５章　ま　と　め

本年度発掘調査の実施された蝦夷塚古墳群の所在地は、検出された遺構・遺物から縄文時代・奈良時代・平安時代の複合遺跡であることが判明した。

今回主たる調査対象となった古墳遺構は、水田造成（昭和30年頃の耕地整理）のために墳丘部がすでに失われており、主体部も残存していなかった。また４号墳・13号墳については、大部分が調査区外にあり、墳丘および主体部の残存の有無を確認することはできなかった。このため、調査区内に残存する古墳周堀を調査するにとどまったが、以下の点について知ることができた。

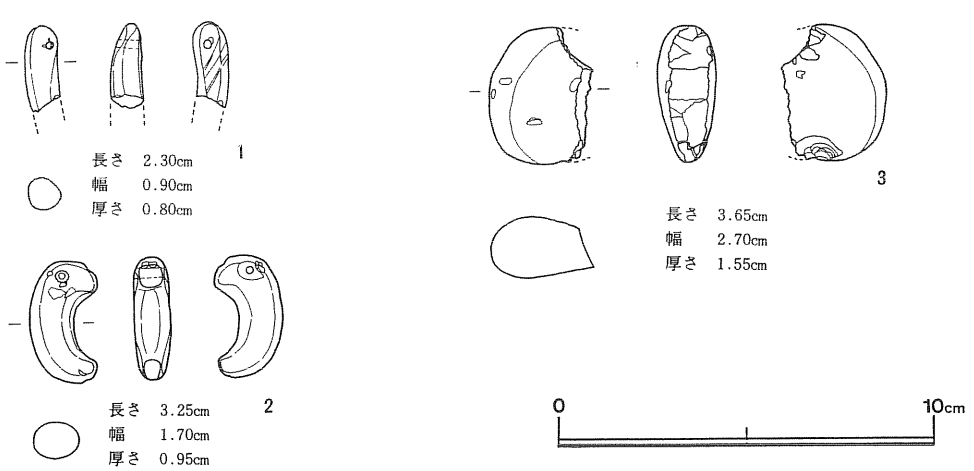
①古墳の規模は、最小の古墳である７号墳で周堀内周の直径約3.56ｍ、外周の直径約5.04ｍ、最大の古墳である１号墳で周堀内周の直径約7.80ｍ、外周の直径約 10.80 ｍであり、他の古墳はこの両者の間に位置付けられる。②古墳周堀の形態は、周堀が全周している１号墳と周堀が全周せず南東部に開口部を持つ３号墳の２タイプである。③各古墳の間隔は一定していないが、空間にある程度の余裕がみられる。古墳どうしの切り合い関係はない。④ほとんどの古墳周堀には、確認面において火山灰が混入している。

蝦夷塚古墳群は雄物川の近くに立地する古墳群であるため、主体部（遺骸埋葬施設）と墳丘部には河原石などが使用されているものと予測して調査を行ったが、前述したごとく墳丘は失われていたため明確にこれらのことを知ることはできなかった。だが、古墳周堀内外および調査区域内には河原石がひとつも検出されなかったことから、墳丘内外の施設には河原石などを使用せず、主体部は木棺直葬でこれを覆う墳丘は地上２～３ｍ位の盛土であったものと復原しておきたい。

さて、当古墳群の成立時期を把握する資料として、１号墳出土の底部穿孔の土師器甕（第９図12）と、２号墳出土の底部穿孔の内面黒色処理された土師器杯（第13図１）・土師器甕（第13図３）がある。１号墳出土の甕は周堀南東部の底面に近い埋土中から押しつぶされたような形で出土したものである。２号墳の杯・甕の出土位置は南東開口部の西部周堀で、杯は周堀底面から正位して出土し、甕はこの杯の数cm上から一括して出土したものである。その出土状態からこれらの土器は埋納されたものであり、時期は８世紀中頃と思われる。したがって蝦夷塚古墳群もこの頃に構築されたものであると考えられる。

また、１号墳周堀北西部の焼土上面およびその付近から出土した須恵器・杯・蓋・壺・土師器杯・甕（第８図、第９図10・11、第10図）などは、９世紀後半以降の平安時代の遺物と考えられる。

最後に、13号墳の検出によって蝦夷塚古墳群の範囲は、現調査地よりさらに南側に広がっていくことがわかった。さらに、本調査区からは玉類の出土はなかったが、思いがけなく調査区外北側の黒色表土の厚い畑地で、２個の勾玉と勾玉の原石と思われる石（第21図）を表採することができた。このことから、墳丘部や主体部が残存している可能性が考えられた。今後、今回の調査で把握できなかった墳丘・主体部などの諸点と、古墳群の範囲を解明するこの地の調査を期待して結びとする。



第21図　調査区外北側畑地表採遺物

参考文献

山形縣文化財保護協會 『山形縣の古墳』 1953（昭和28年）

雄物川町文化財委員会 『雄物川町郷土史資料』第１集 1959（昭和34年）

奈良修介・豊島 昂 「秋田県南秋田郡五城目町岩野山古墳」『秋田考古学』第19号 1961（昭和36年）

岩手県教育委員会 『五条丸古墳群』 1963（昭和38年）

奈良修介・豊島 昂 『秋田県の考古学』 郷土考古学叢書 1967（昭和42年）

秋田県教育委員会 『足田遺跡第６次発掘調査略報』 1972（昭和47年）

羽後町教育委員会 『足田遺跡第７次発掘調査略報』 1974（昭和49年）

藤田亮策監修・日本考古学協会編 『日本考古学辞典』 1974（昭和49年）

高柳光寿・竹内理三編 『日本史辞典』 1974（昭和49年）

秋田県教育センター 『秋田のあゆみ』秋田県郷土教育資料歴史編 1976（昭和51年）

内田武志・宮本常一 『菅江真澄全集』第六巻 1976（昭和51年）

横手市教育委員会 『郷士館窯跡』 1976（昭和51年）

秋田県 『秋田県史』考古編 1977（昭和52年）

三上礼子 「秋田県における古墳遺跡について」『秋田考古学』第34・35合併号 1978（昭和53年）

岩手県江釣子村教育委員会 『猫谷地・五条丸古墳群』（増補再刊） 1978（昭和53年）

岩手県教育委員会・日本道路公団 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 1979（昭和54年）

雄物川町役場 『雄物川町郷土史』 1980（昭和55年）

岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』 1980（昭和55年）

（財）岩手県埋蔵文化財センター・建設省岩手工事事務所 『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）』 1981（昭和56年）

江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編 『日本考古学小辞典』 1983（昭和58年）

玉口時雄・小金井靖 『土師器・須恵器の知識』考古学シリーズ17 1984（昭和59年）

川西町教育委員会 『天神森古墳発掘調査報告書』 1984（昭和59年）

岩崎卓也 『古墳時代の知識』考古学シリーズ６ 1984（昭和59年）

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 1984（昭和59年）

雄物川町郷土資料館 『雄物川町郷土資料館報告』第２号 1985（昭和60年）

白石太一郎 『古墳の知識Ⅰ－墳丘と内部構造』考古学シリーズ19 1985（昭和60年）

別編Ⅰ　蝦夷塚古墳群の火山灰

庄子　貞雄・山田　一郎（東北大学農学部）

蝦夷塚古墳群第１号墳の周堀には細粒で灰白色（乾で10ＹＲ7/3、湿で10ＹＲ5/4）の火山灰が認られる。この火山灰の一次鉱物組成（0.1～0.2mm部分）と粒度組成をしたところ、この火山灰は先に分析した平鹿遺跡（所在地　秋田県平鹿郡増田町増田字平鹿）の火山灰[註1]と極めて類似していた。

第５表には蝦夷塚古墳群と平鹿遺跡の両火山灰の一次鉱物組成を示す。重鉱物含量は両火山灰とも４％とその含量は低い。重鉱物組成は蝦夷塚古墳群の火山灰はシソ輝石がほぼ半分で、残りは普通輝石と磁鉄鉱物である。軽鉱物組成は火山ガラスがほとんどで残りは斜長石である。火山ガラスの形態はスポンジ状が半数で、その他扁平状、繊維状、顆粒状のガラスも認められる。この重鉱物組成、軽鉱物組成、そして火山ガラスの形態は平鹿遺跡中の火山灰と同様の内容である。

第６表には両火山灰の粒度組成を示した。両火山灰とも0.2mm以下の部分が圧倒的であり、極めて細粒である。

筆者らは先に平鹿遺跡の火山灰は一次鉱物組成、磁鉄鉱の化学組成からみて宮城県内に広く分布する灰白色火山灰と同一の火山灰である可能性が強いことを指摘したい。このことから、この蝦夷塚古墳群中の火山灰も宮城県内の灰白色火山灰と同一の火山灰と思われる。なお、宮城県内の灰白色火山灰の年代は10世紀前半と考えられている。[註2]

註１　庄子貞雄、山田一郎「秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析」『平鹿遺跡発掘調査報告書』　pp. 243～247　1983（昭和58年）

註２　白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所紀要』Ⅶ　pp. 1 ～ 38　1980（昭和55年）

第５表　一次鉱物組成（粒数％）

試料名	重鉱物組成				軽鉱物組成					重鉱物含量（重量）%
	シソ輝石	普通輝石	普通角閃石	磁鉄鉱	火山ガラス（形態別）				斜長石	
					スポンジ	扁平	繊維	顆粒		
蝦夷塚古墳群	53	27		20	47	9	14	16	14	4
平鹿	48	18	tr	33	54	7	6	18	14	4

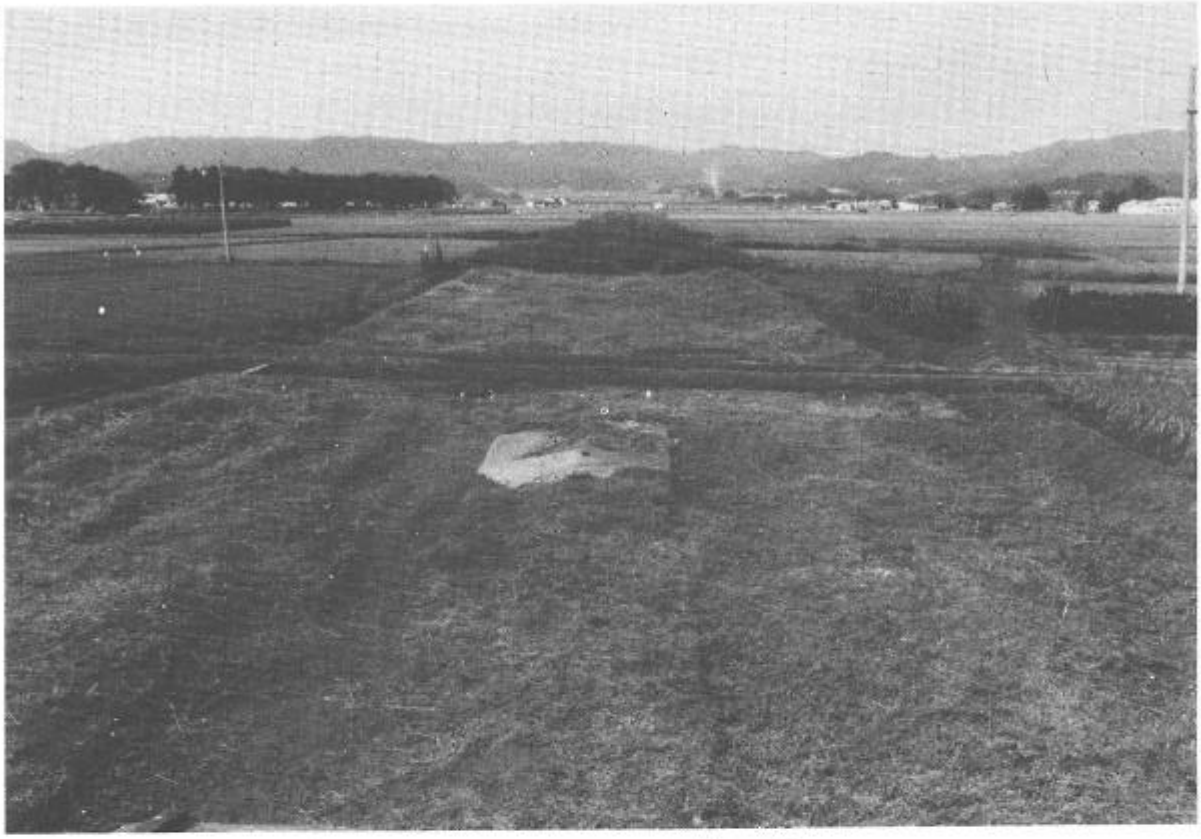
第６表　粒度組成（重量％）

試料名	2mm 以上	2 ～ 0.2mm	0.2mm 以下
蝦夷塚古墳群	tr	1	99
平鹿	0	6	94

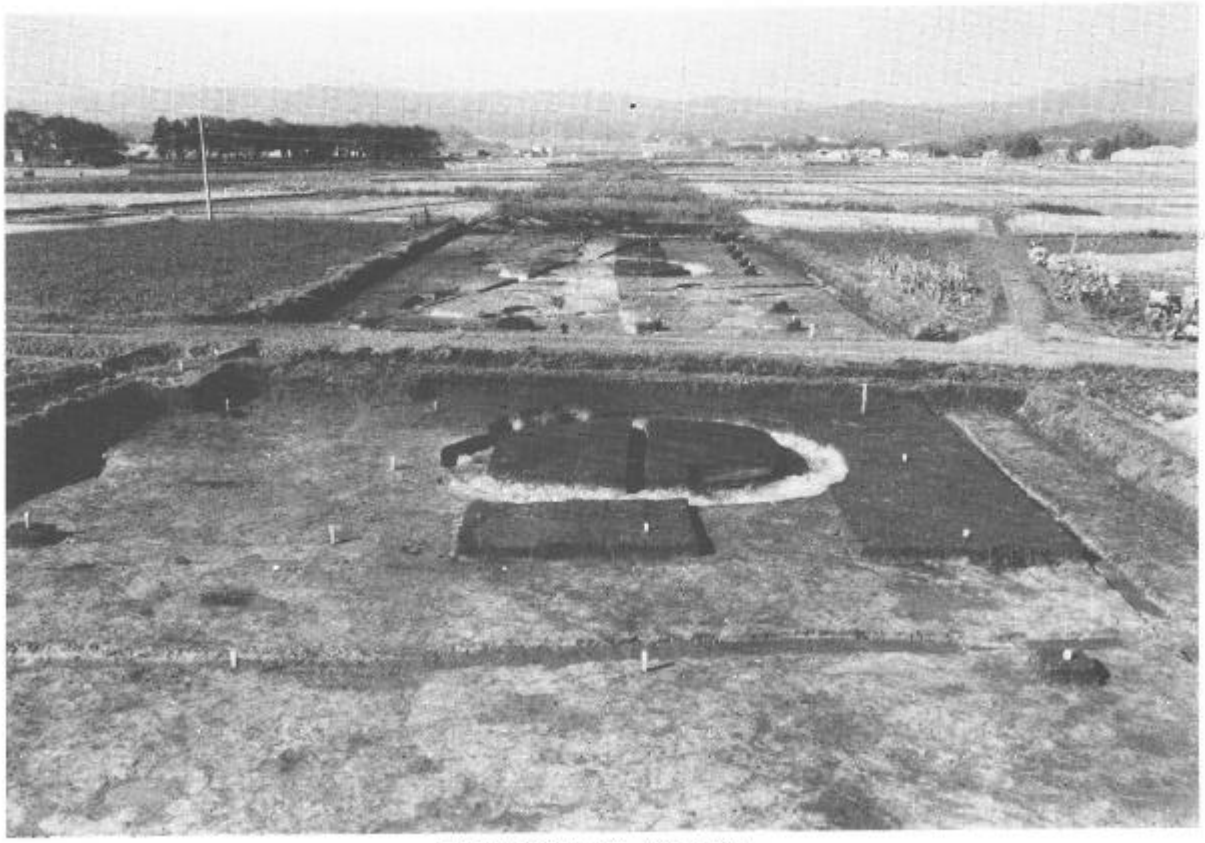
遺跡遠景（北西►南東）

遺跡遠景（北西►南東）

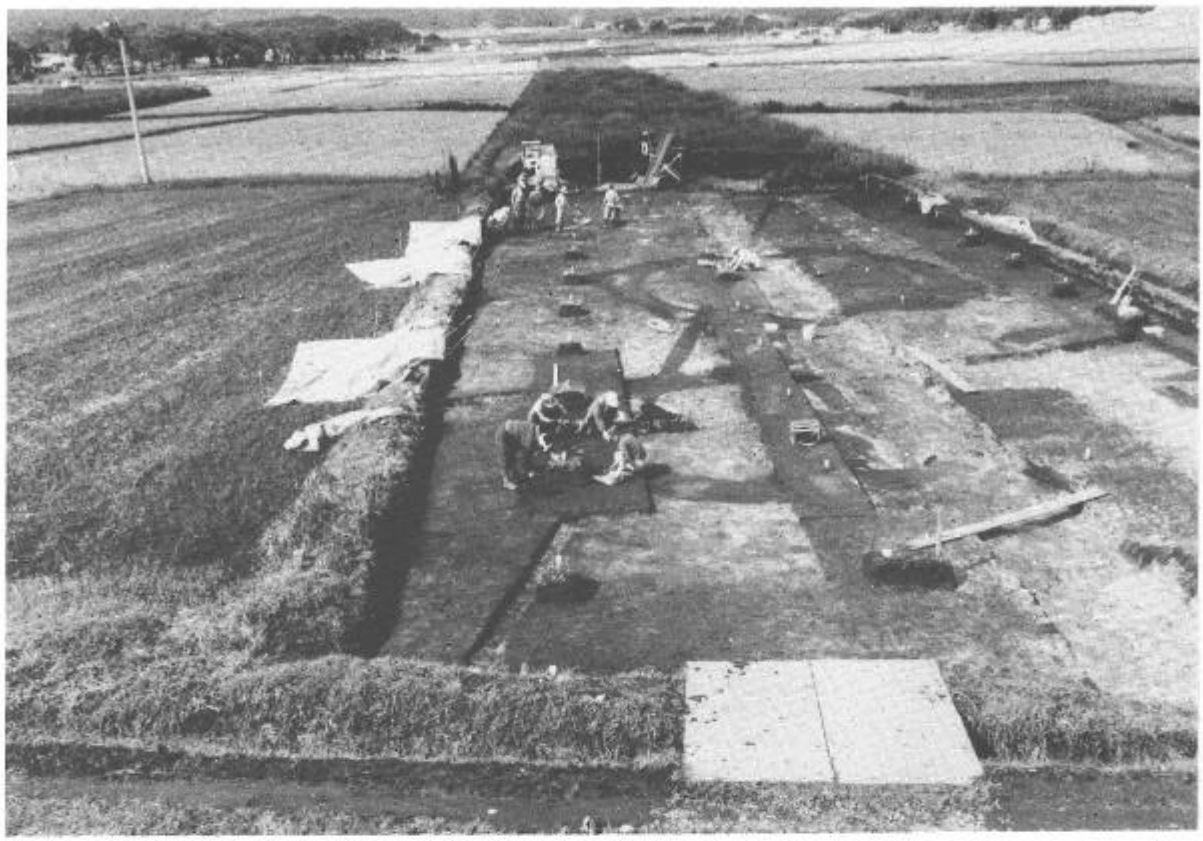
第二図版



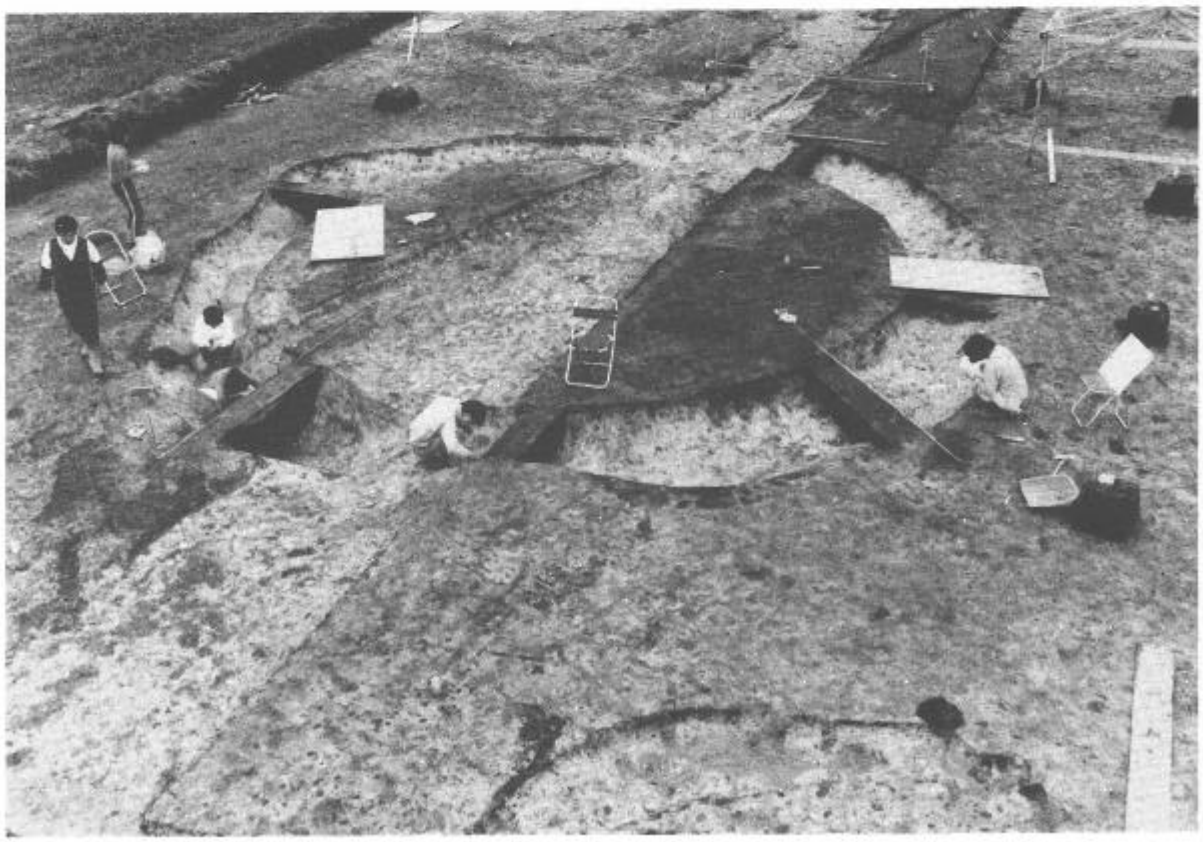
発掘調査前のようす（東►西）



発掘調査終了後（東►西）

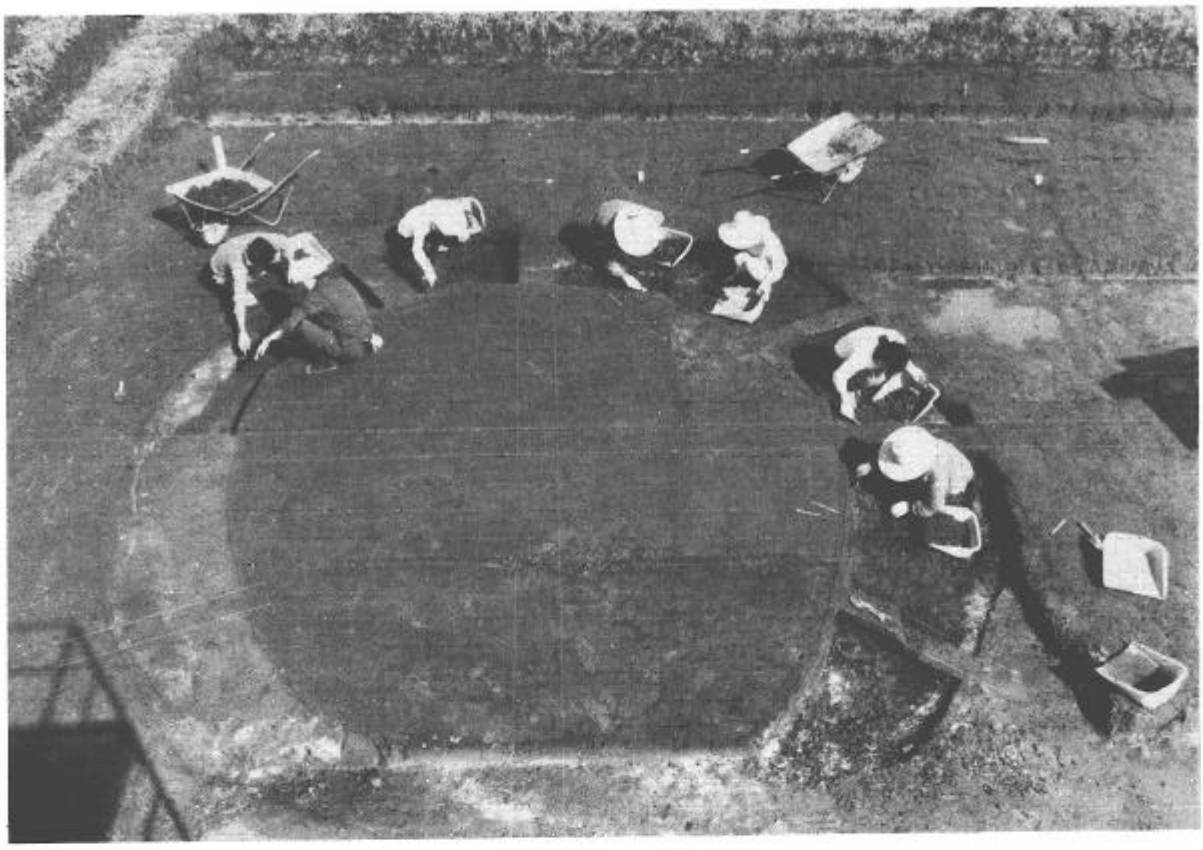


調査風景（南東►北西）



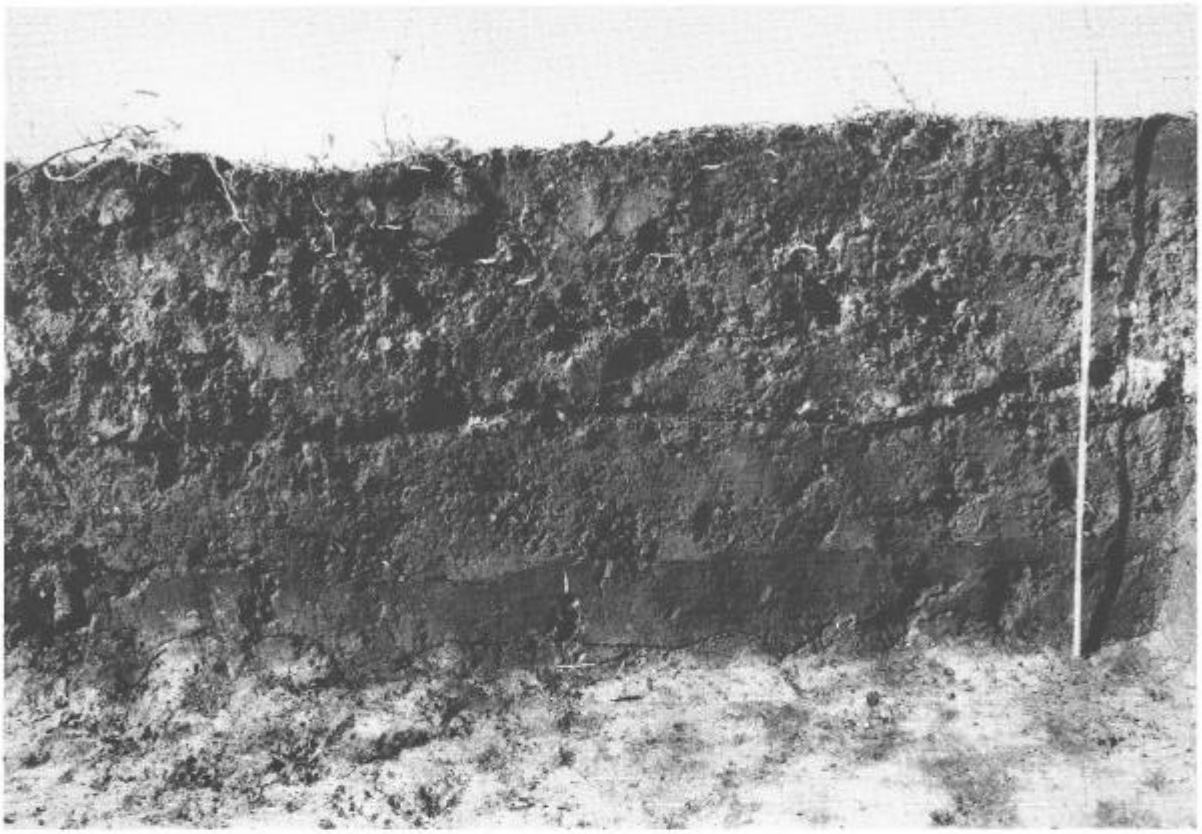
調査風景（北西►南東）

第四図版

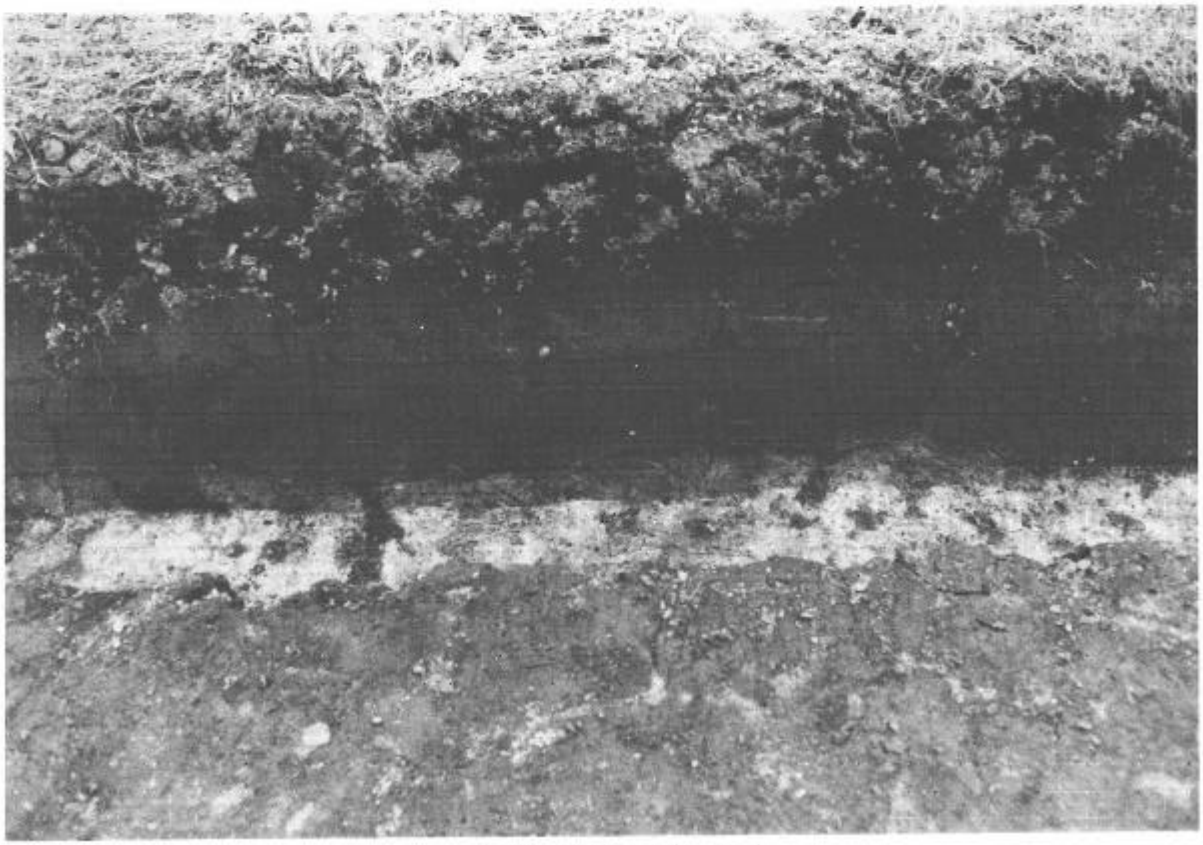


調査風景（南►北）

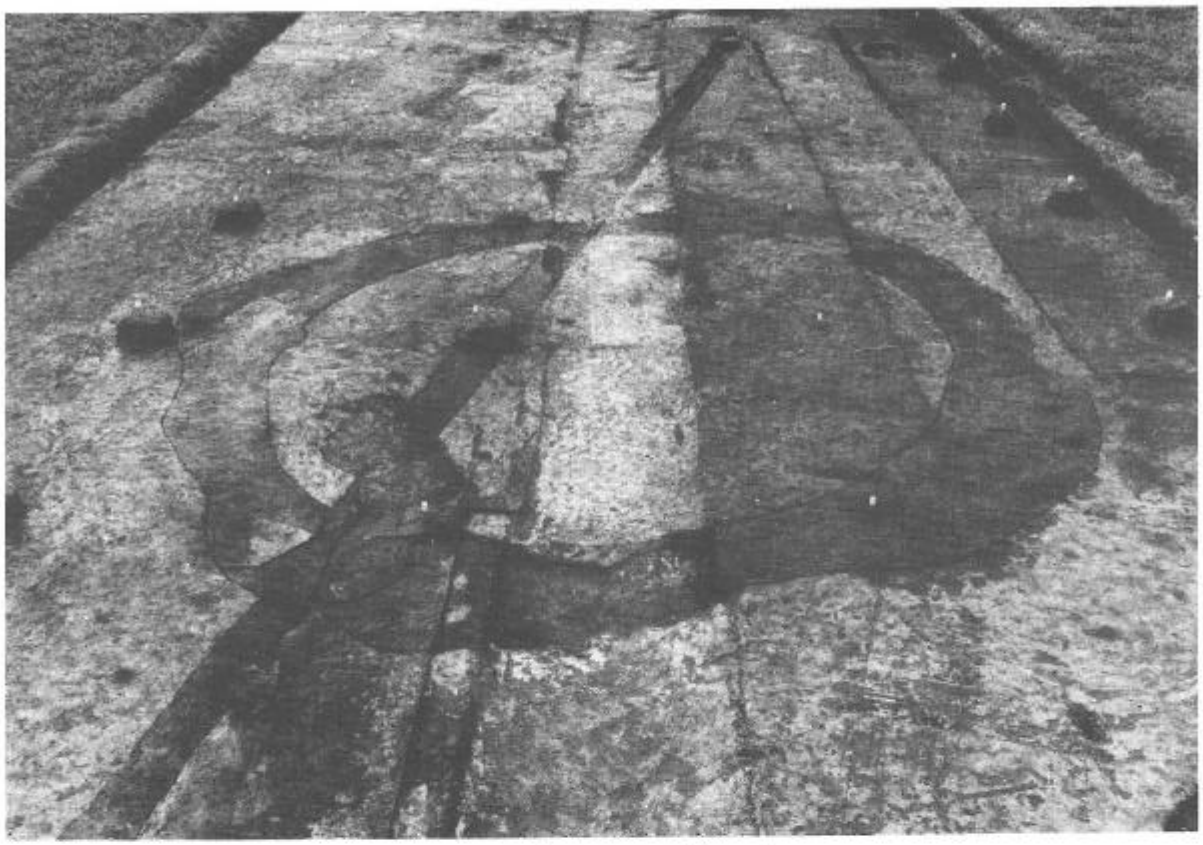
調査風景（北東►南西）



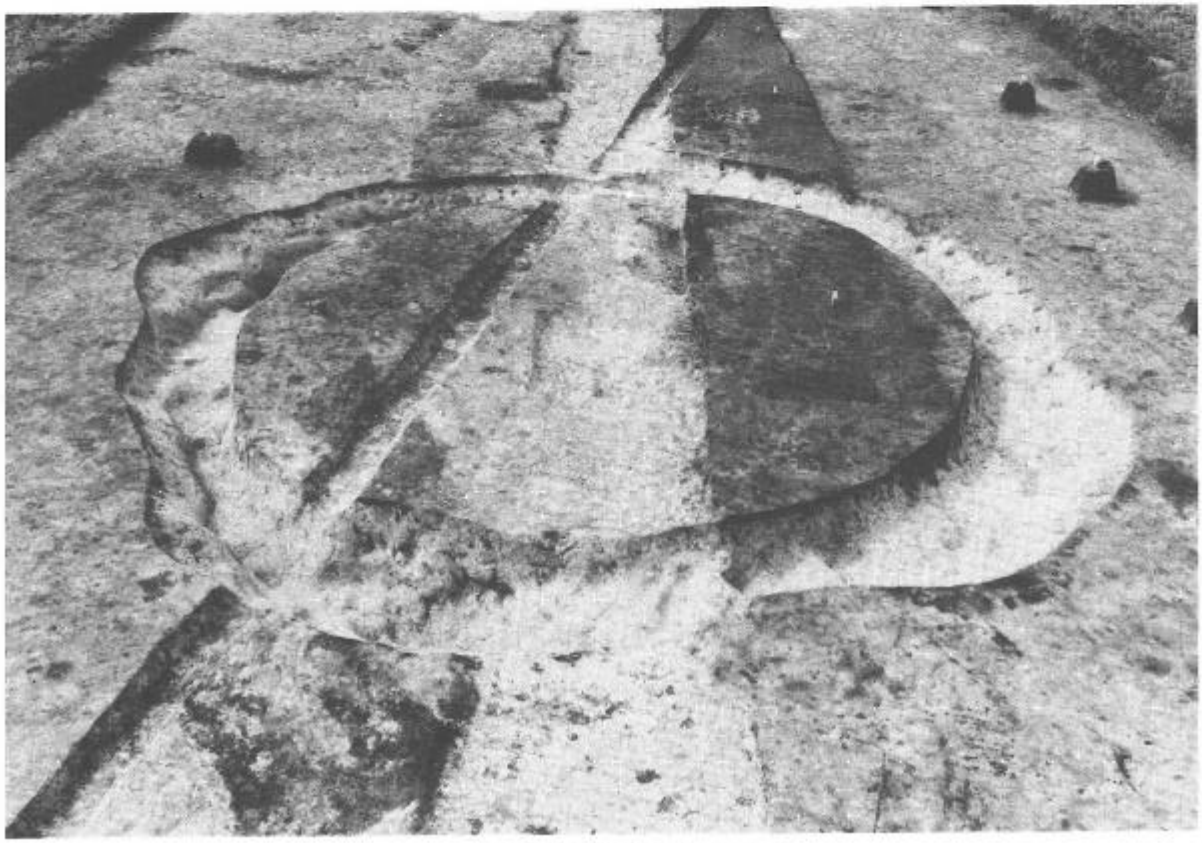
遺跡基本土層（南►北）



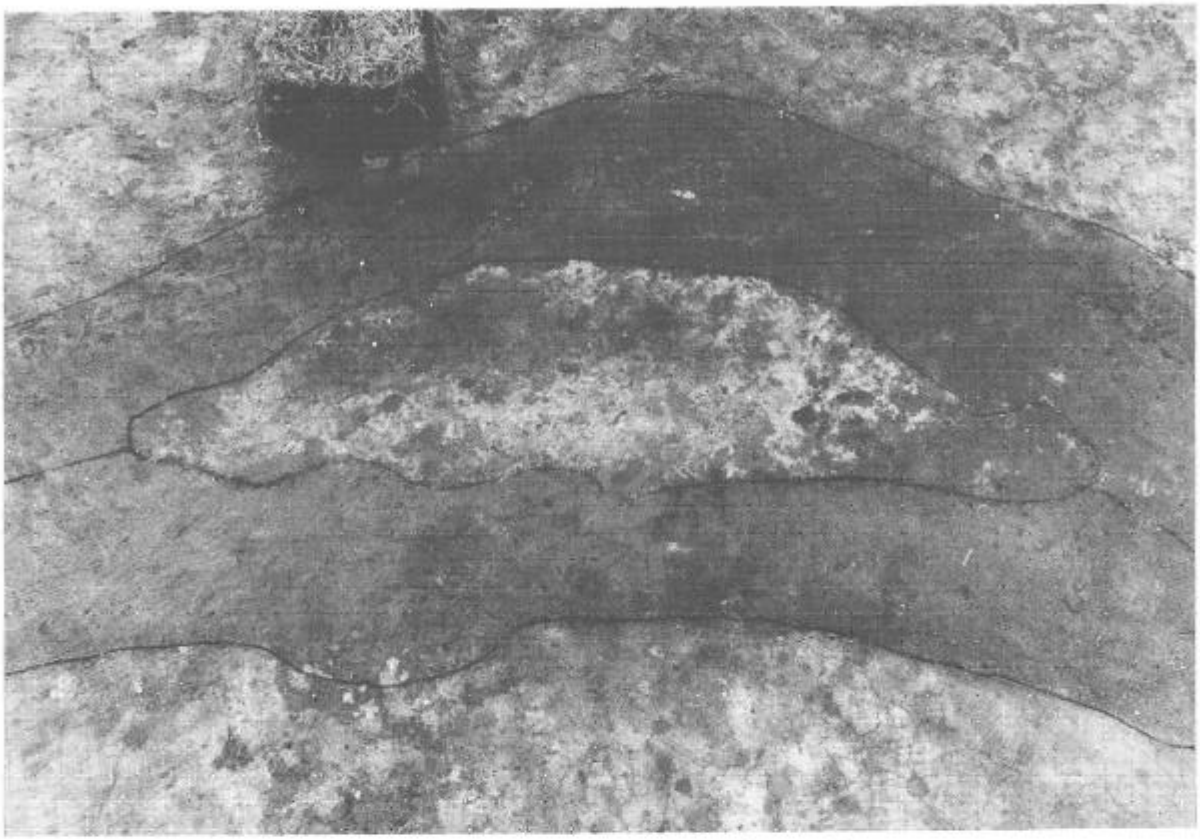
遺跡基本土層（南►北）



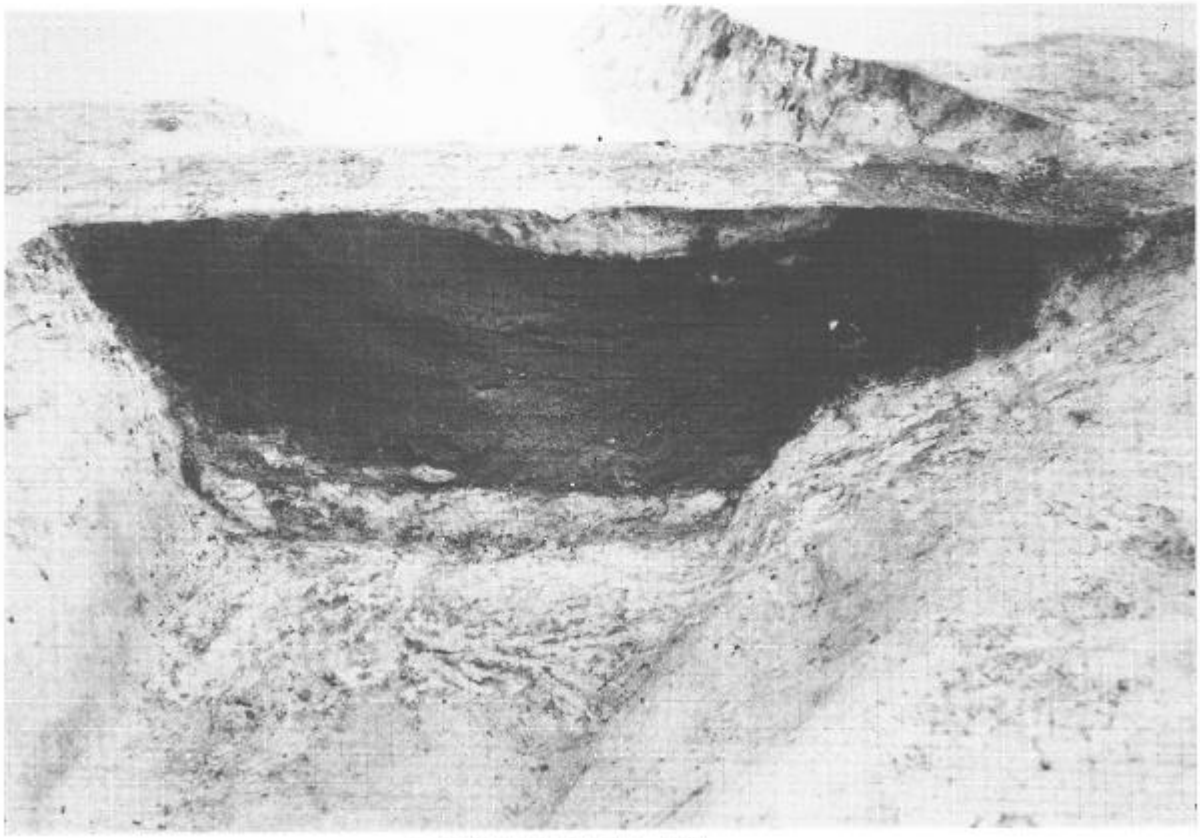
1号墳検出状況（東►西）



1号墳完掘状況（東►西）

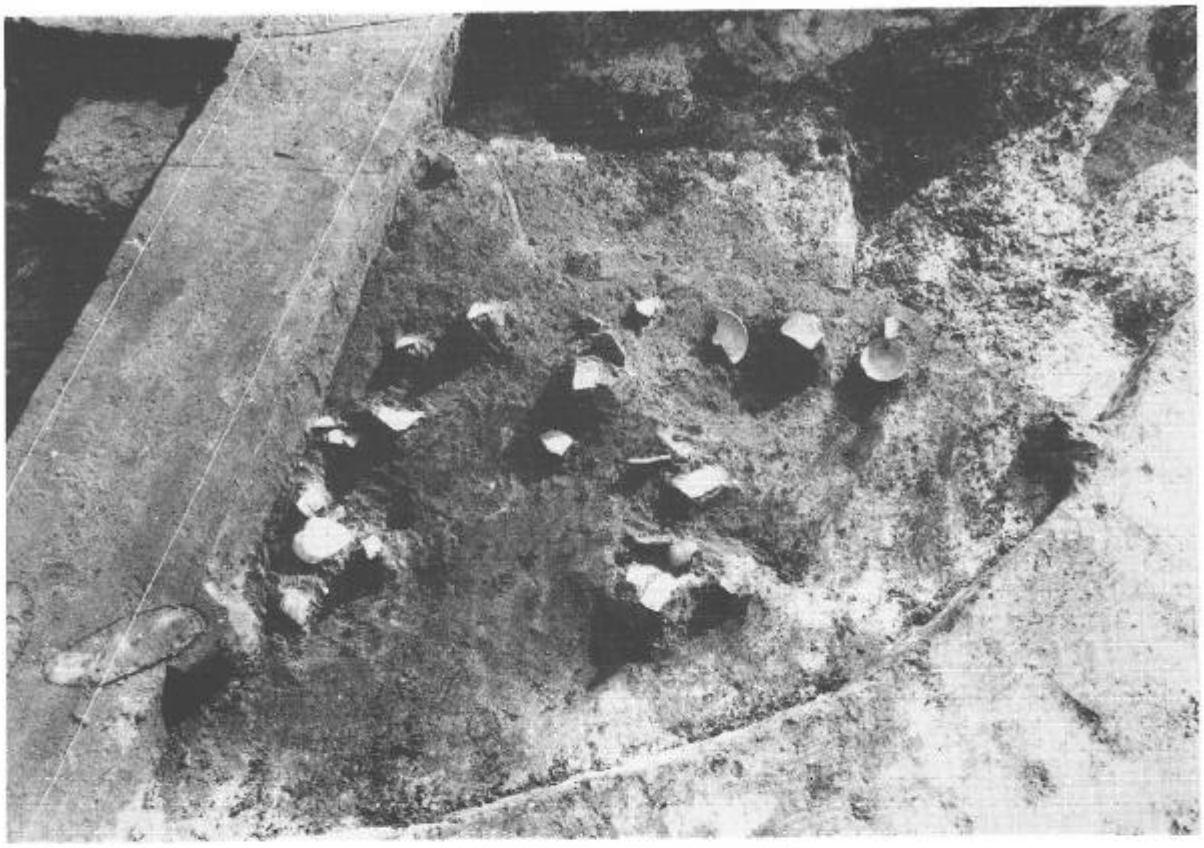


1号墳周堀火山灰検出状況（北►南）



1号墳周堀土層（西►東）

第八図版



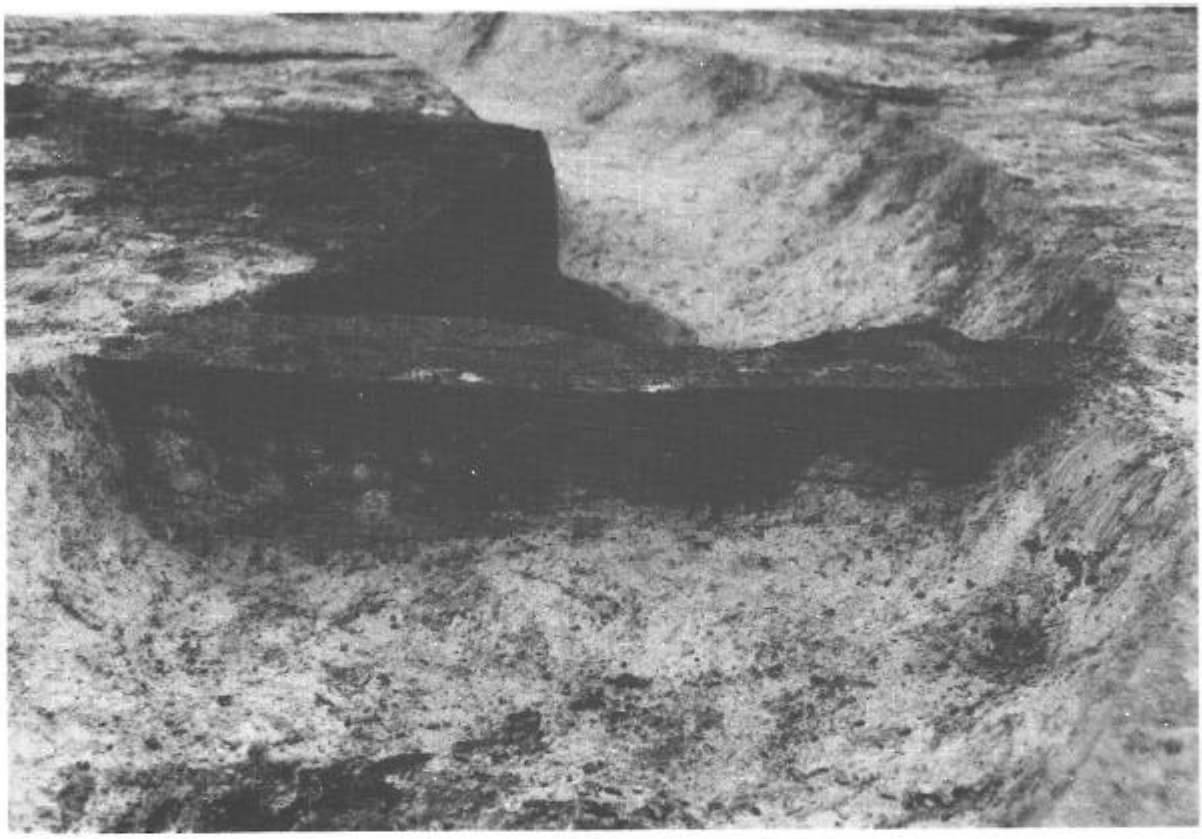
1号墳周堀遺物出土状況（南►北）

1号墳周堀遺物出土状況（南►北）

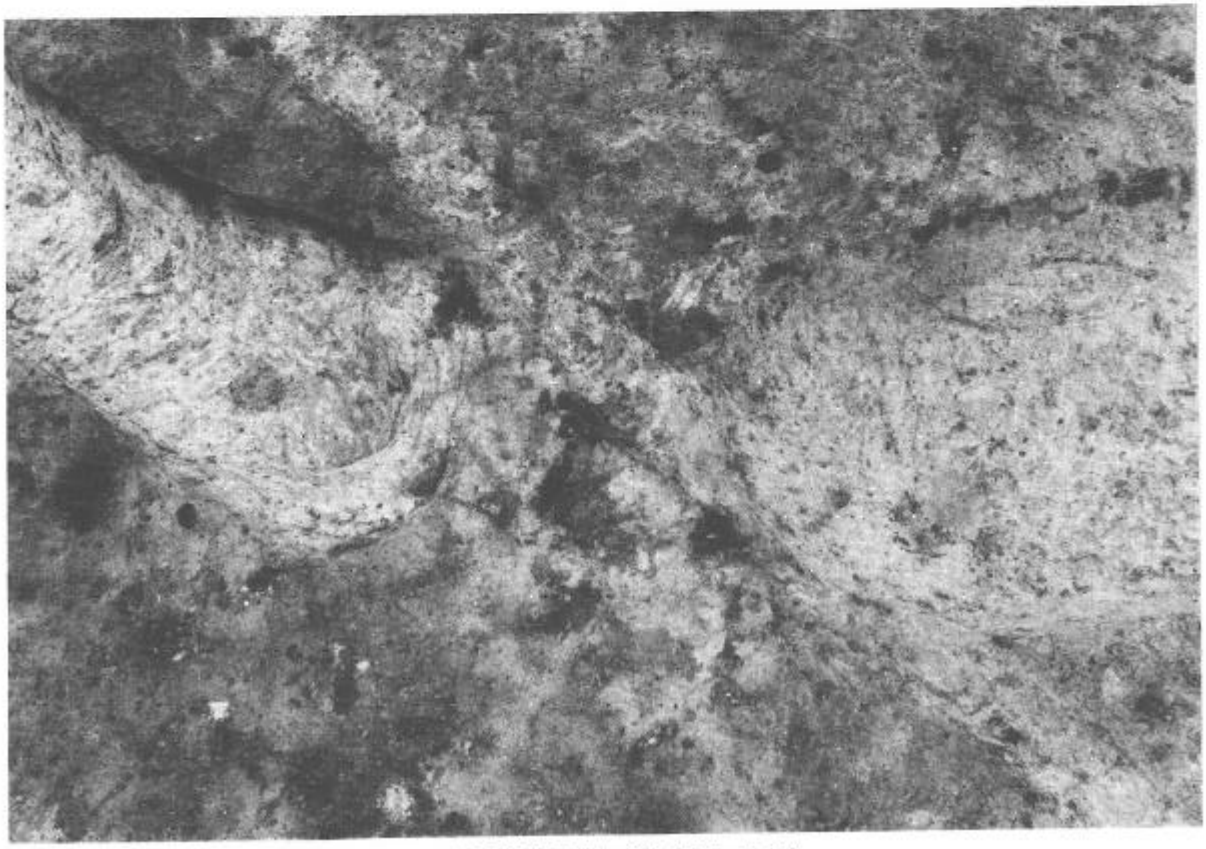
2号墳検出状況（北►南）

2号墳完掘状況（北►南）

第十図版

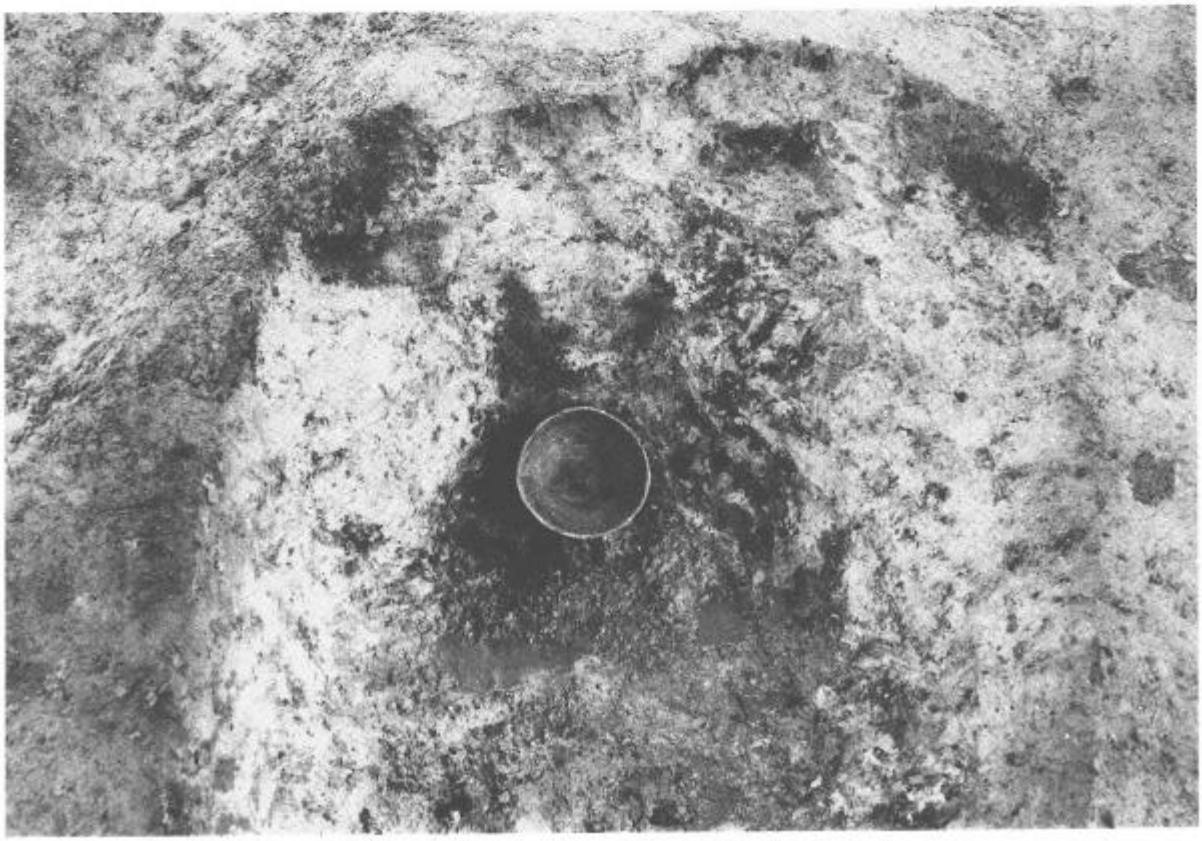


2号墳周堀土層（南►北）

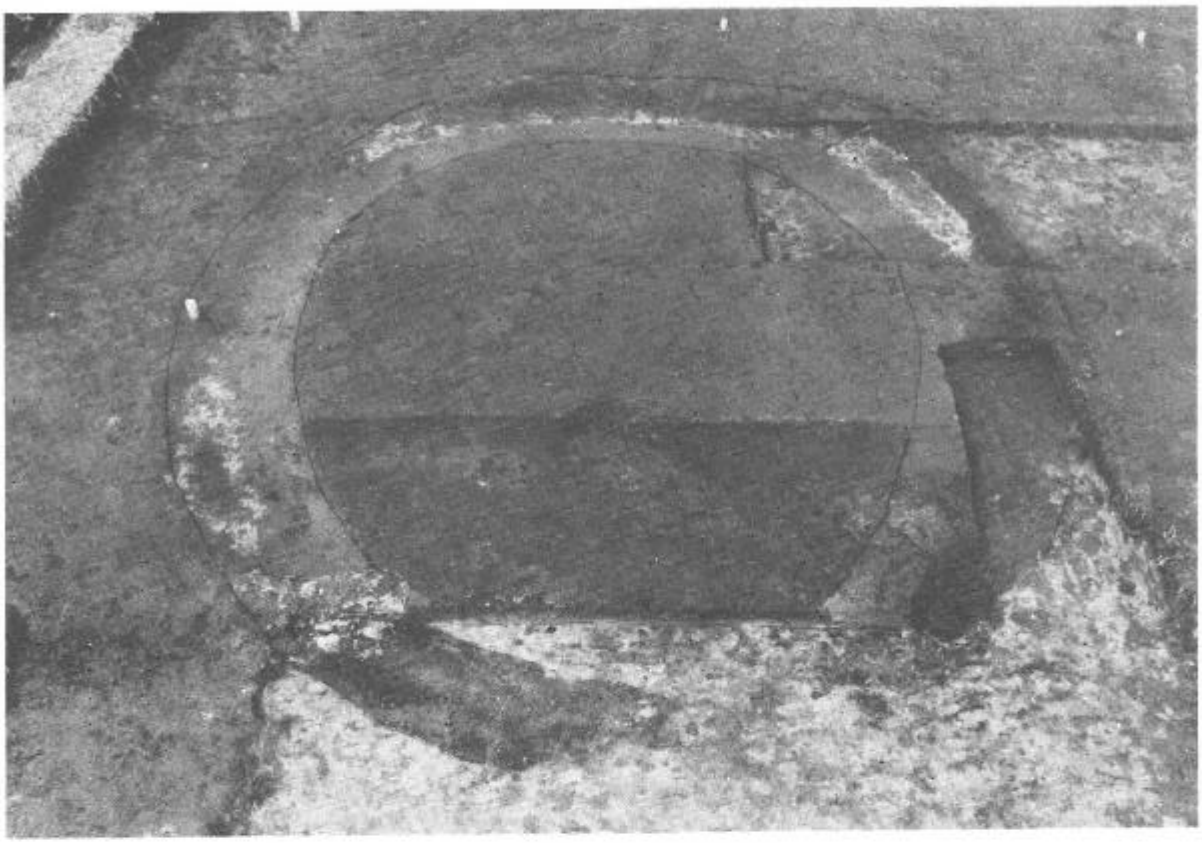


2号墳周堀開口部（真上から）

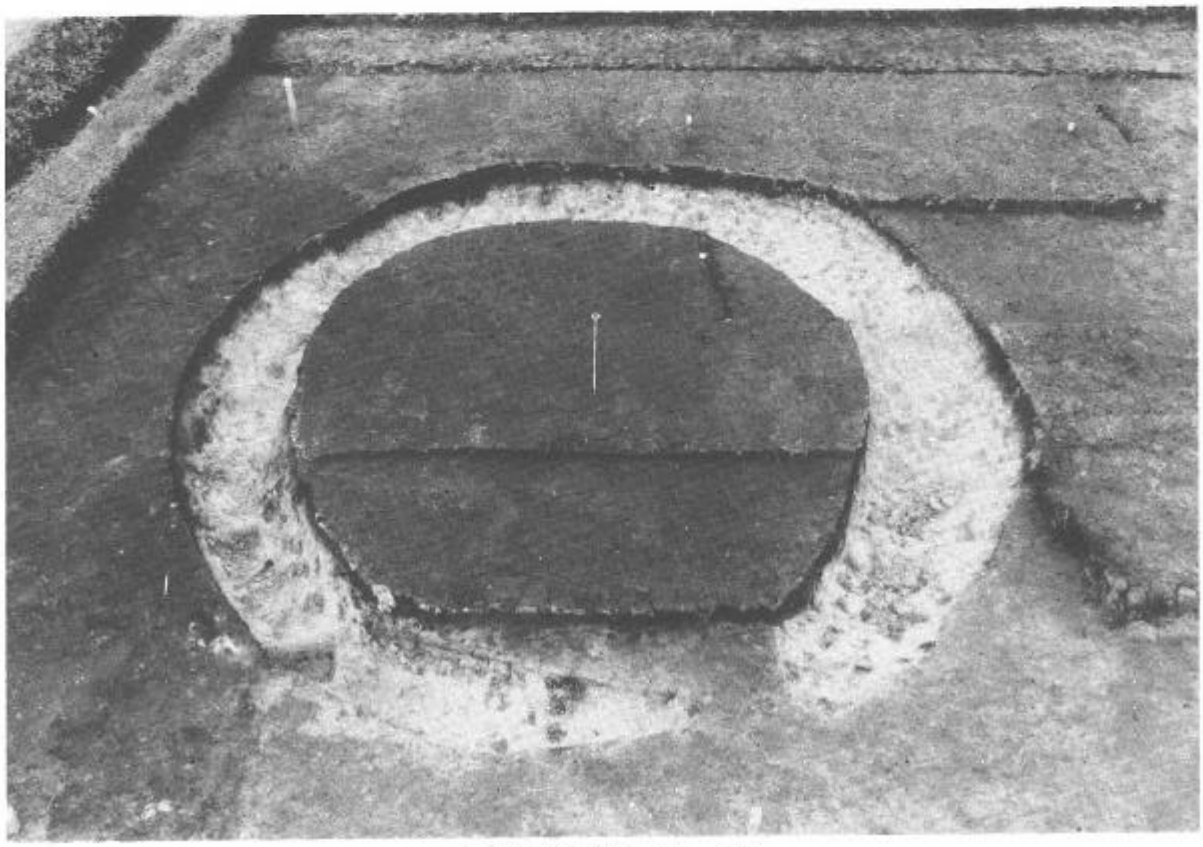
2号墳周堀遺物出土状況（真上から）



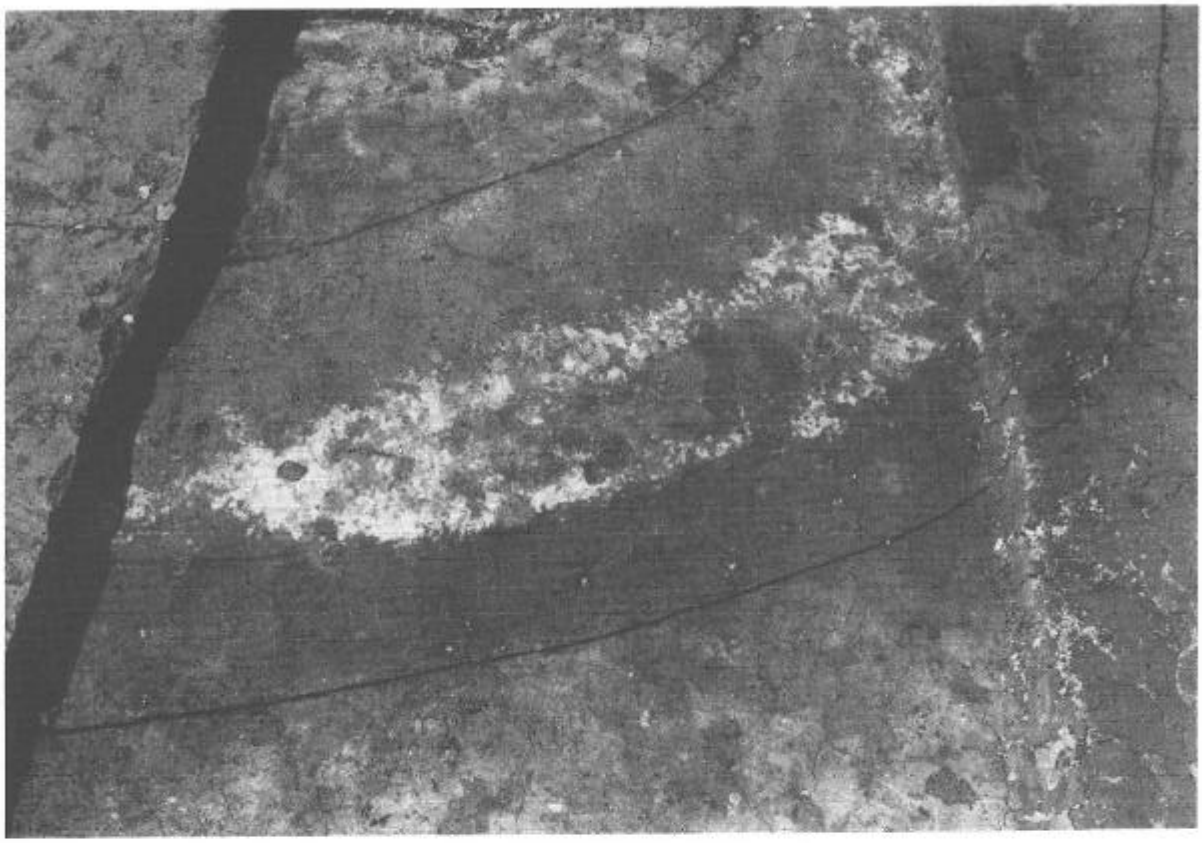
2号墳周堀遺物出土状況（真上から）



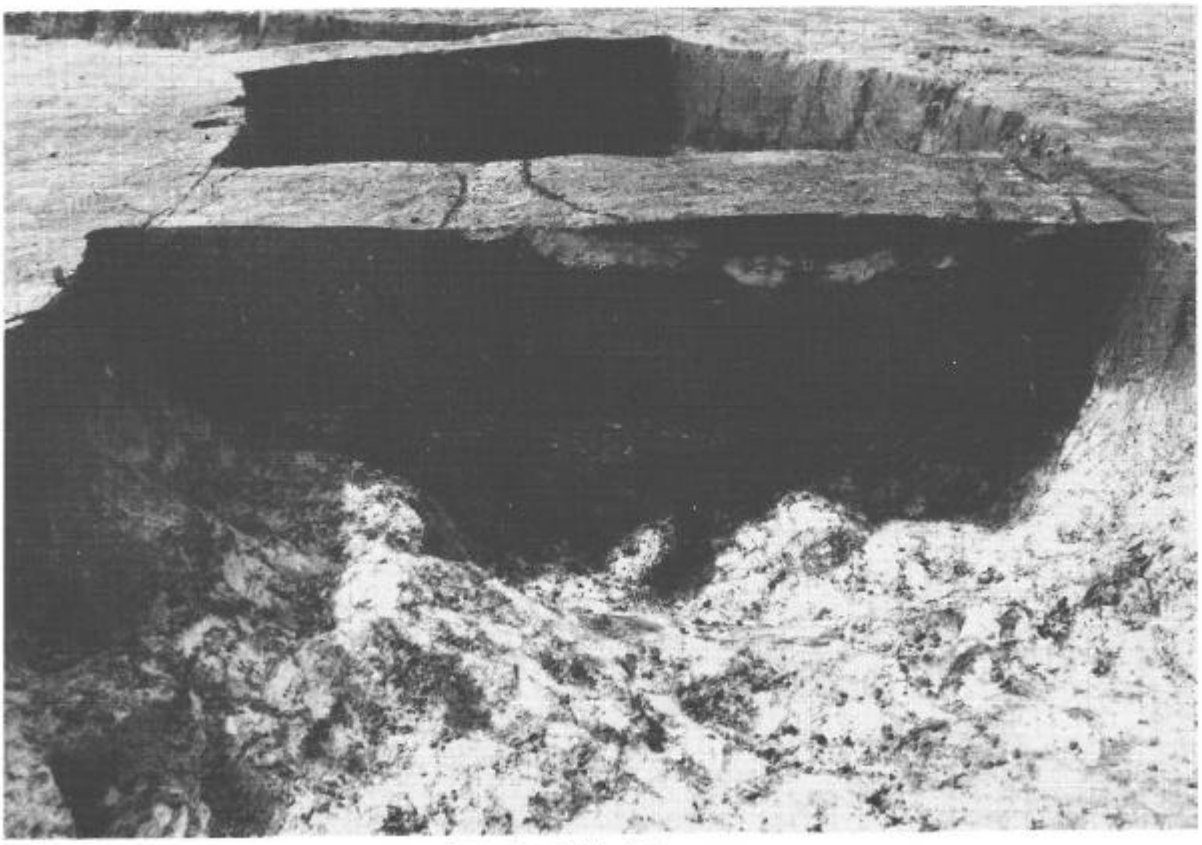
3号墳検出状況（南►北）



3号墳完掘状況（南►北）



3号墳周堀火山灰検出状況（東►西）

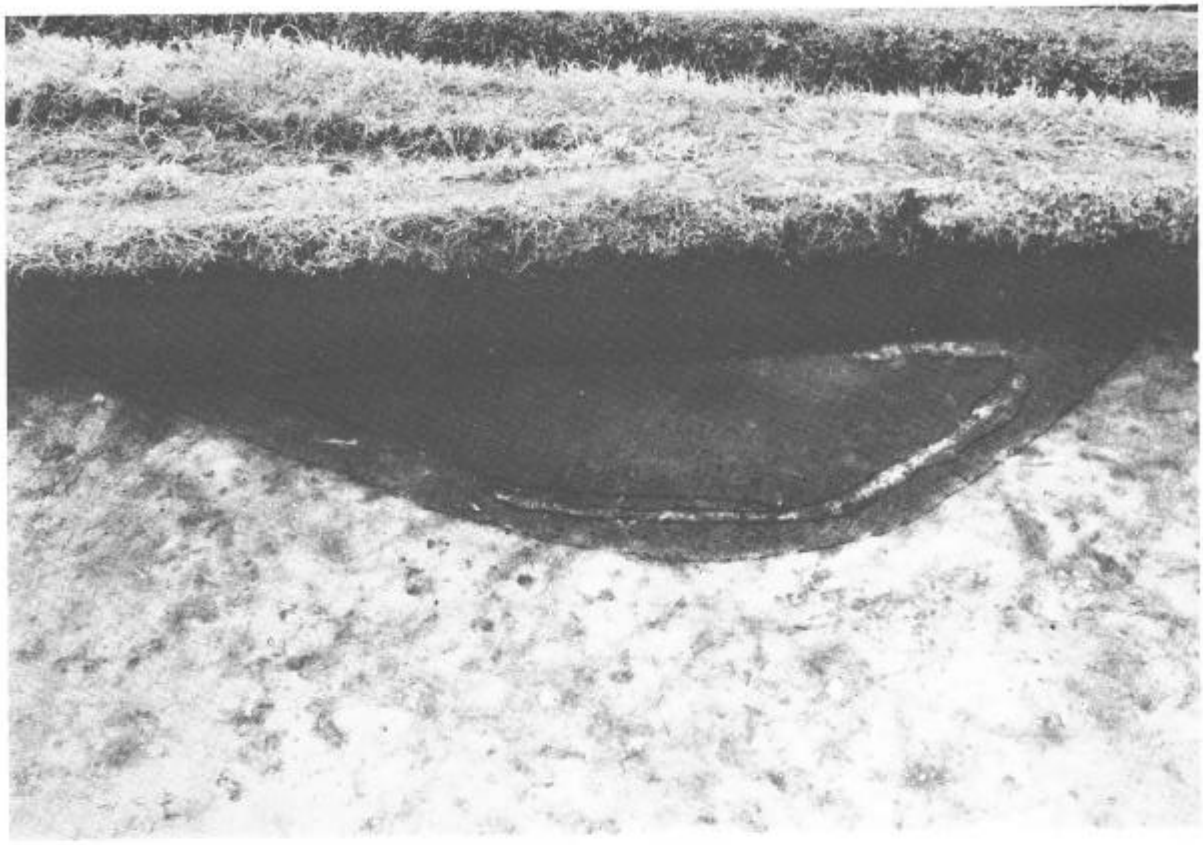


3号墳周堀土層（南北）

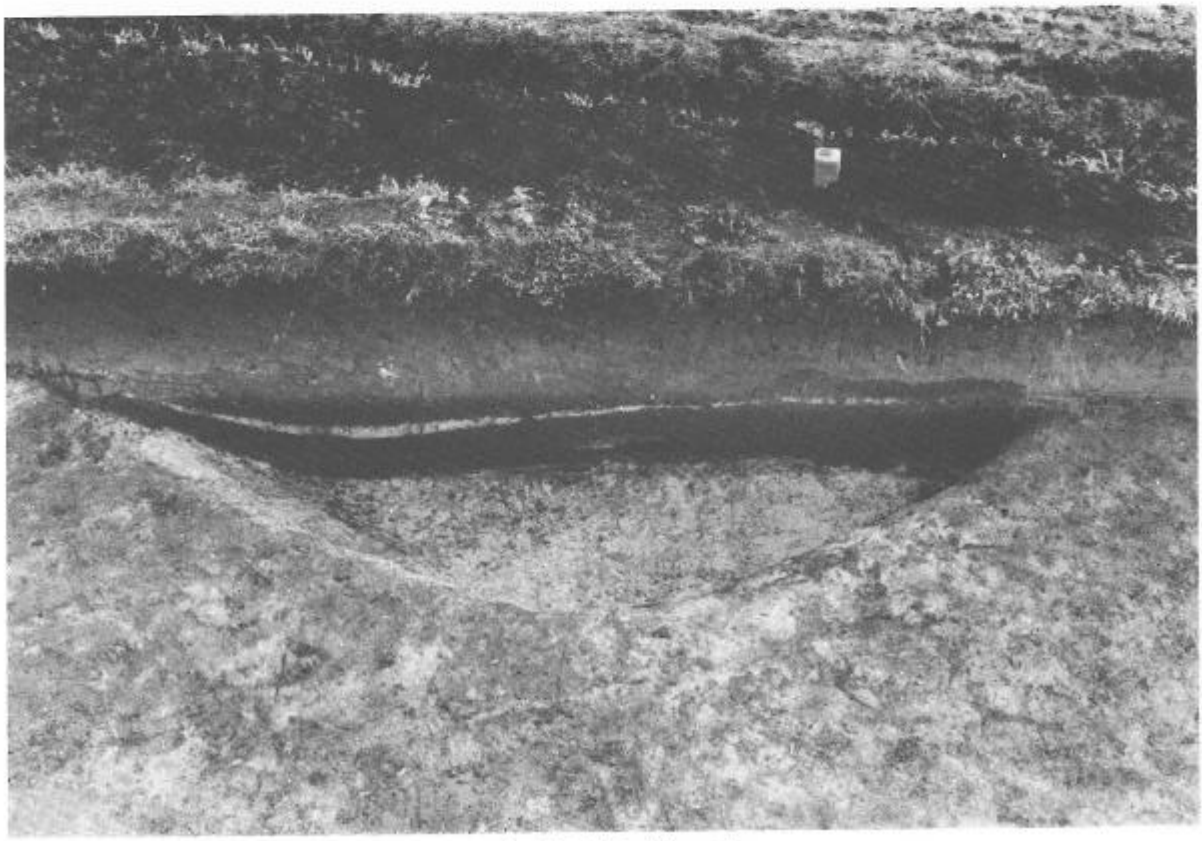
第十四図版

7号墳検出状況（西►東）

7号墳完掘状況（南►北）

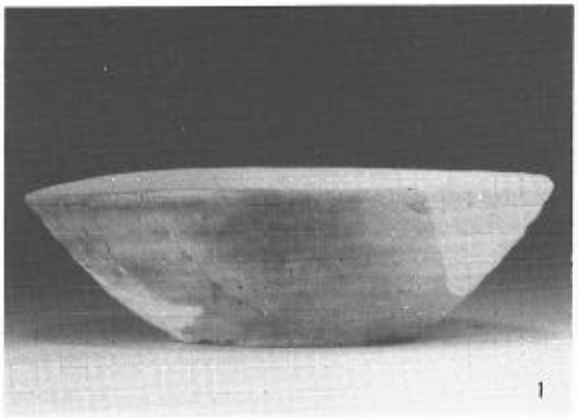


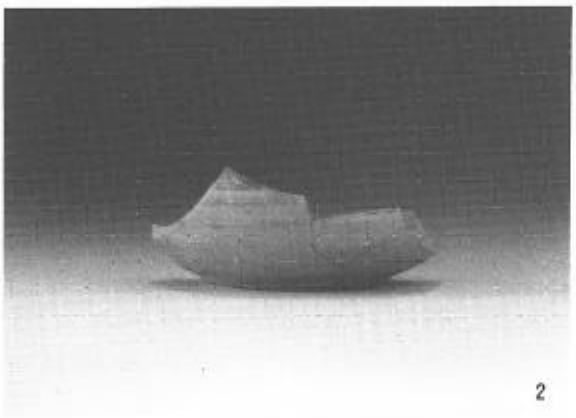
13号墳検出状況（東►西）

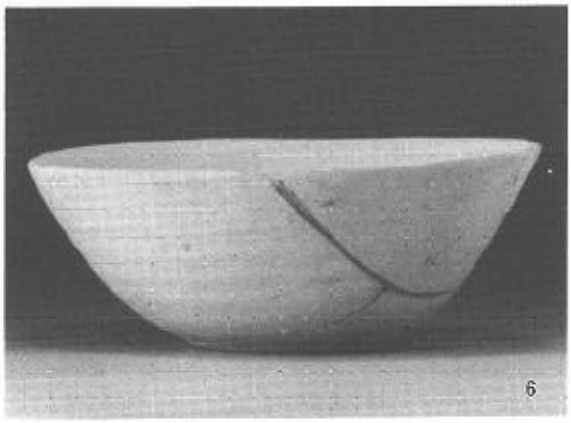


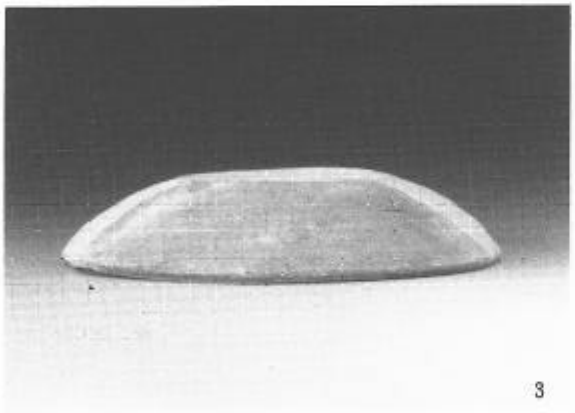
13号墳完掘状況（東►西）

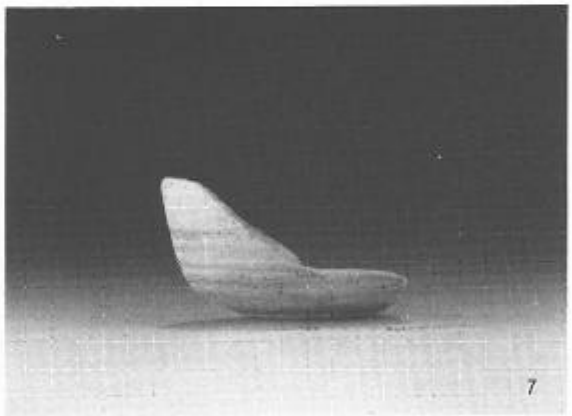
第十六図版

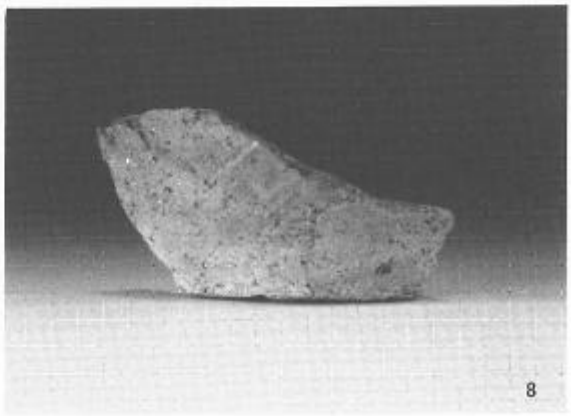




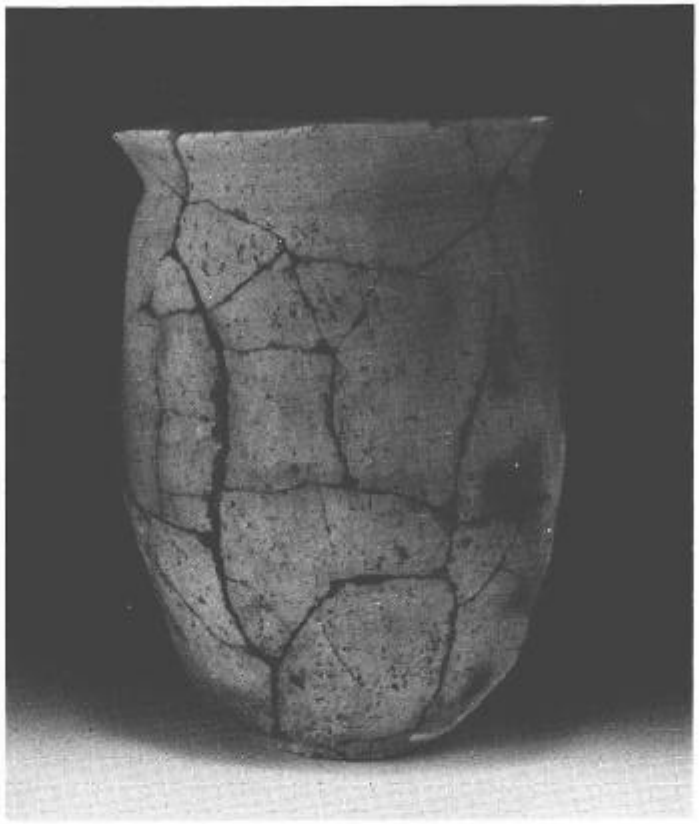








1号墳出土土器



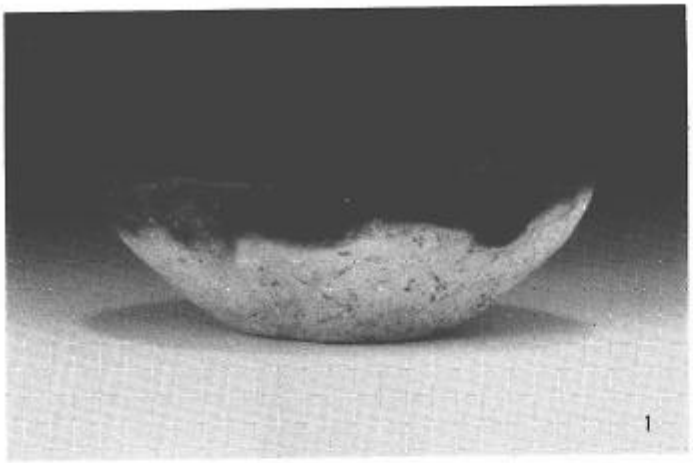
9

10

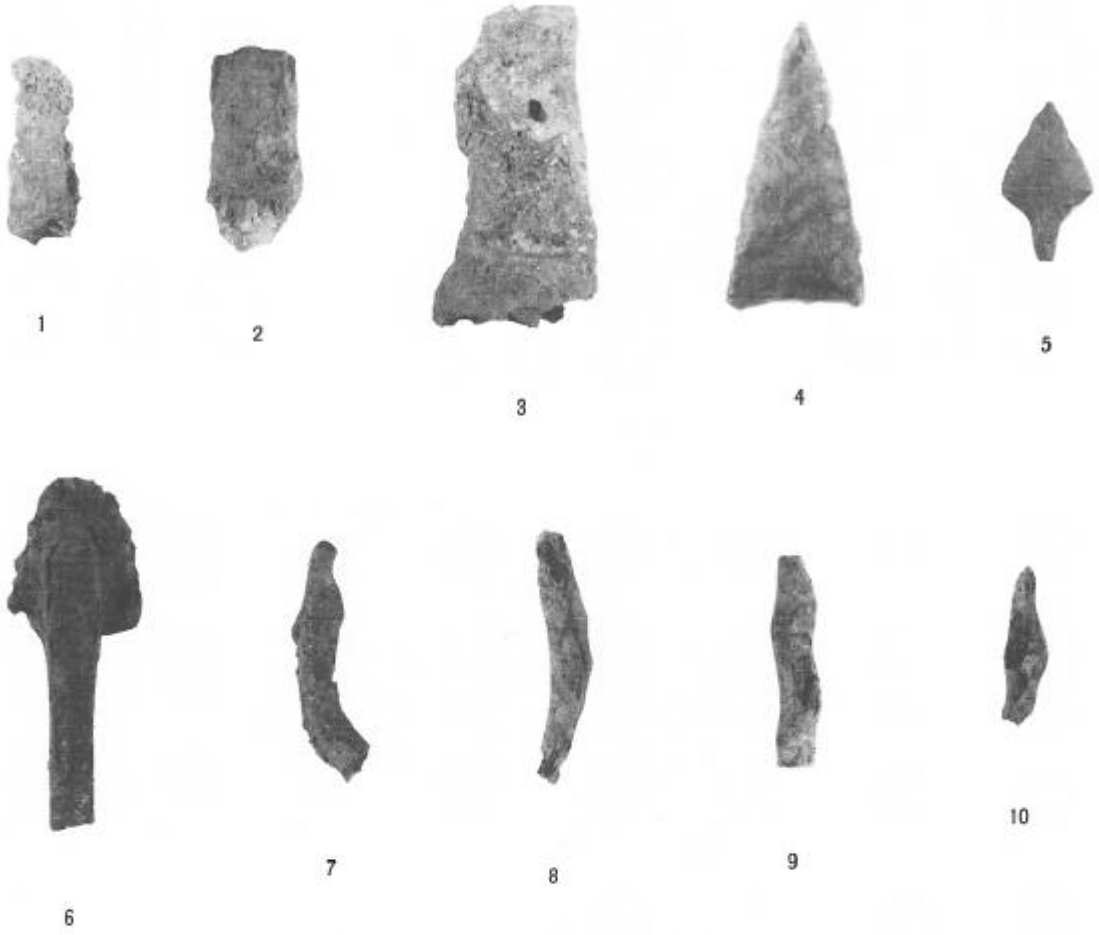
11

1号墳出土土器

第十八図版

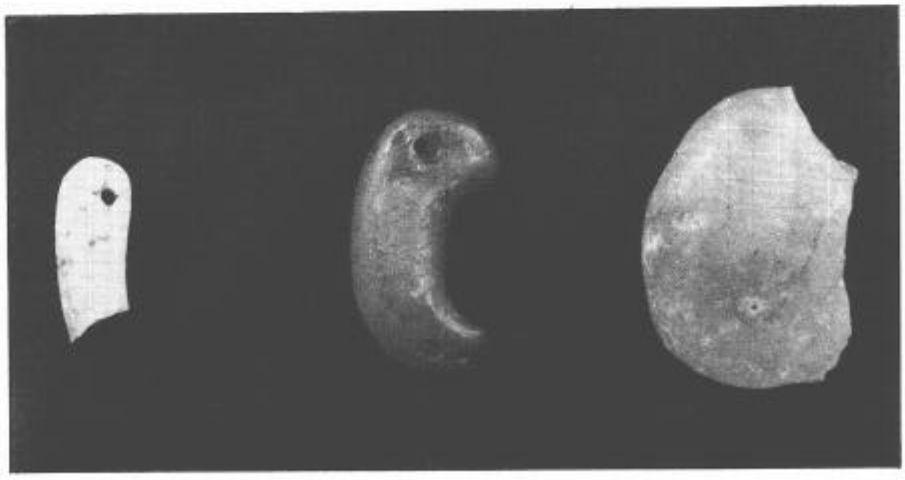


2号墳出土土器

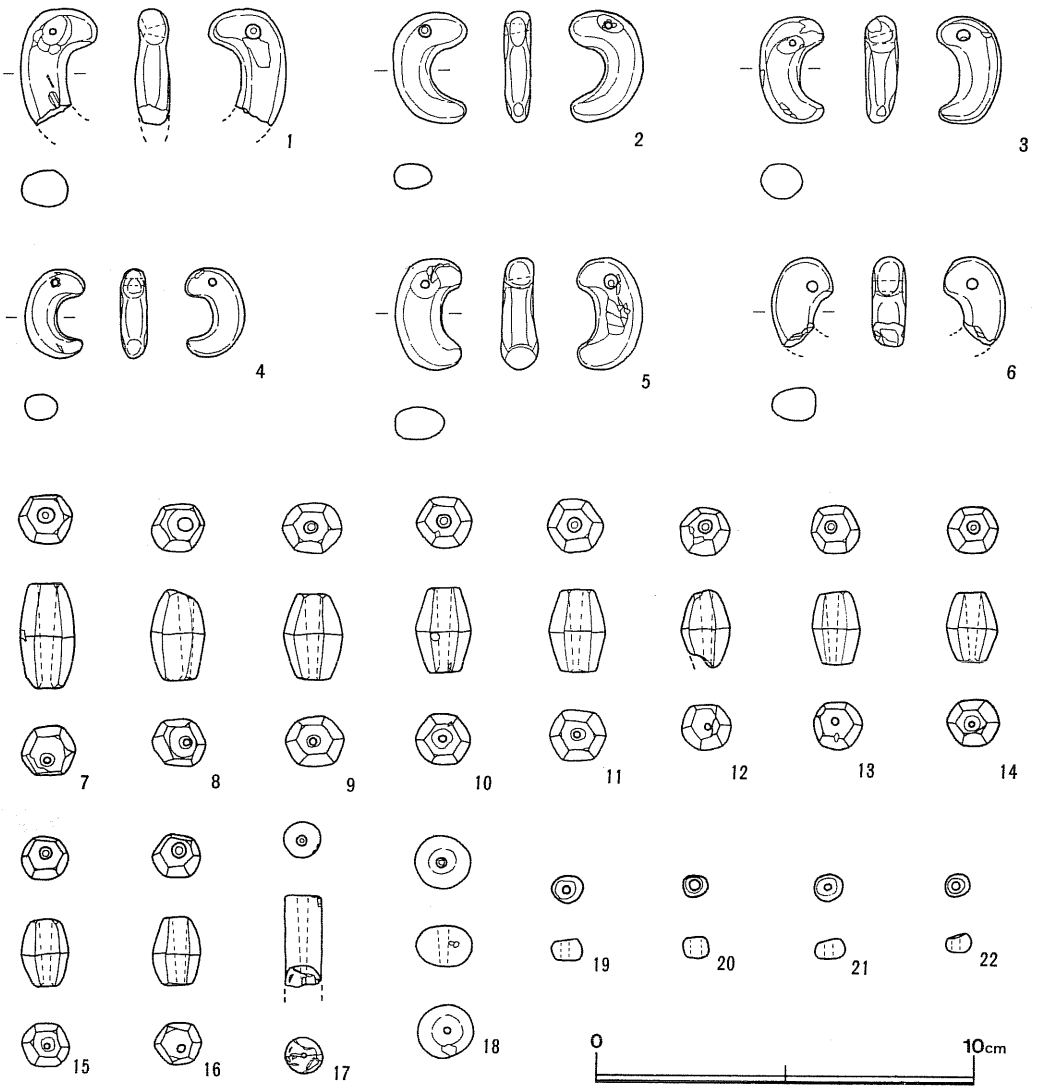


1－7　1号墳出土遺物
8～10　SD01溝出土遺物

出　土　遺　物



調査区外北側畑地表採遺物



番号	名　称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	名　称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	瑪瑙勾玉	3.10	1.20	0.95	6.50	12	水晶切子玉	2.00		1.30	3.90
2	瑪瑙勾玉	3.00	1.00	0.65	5.30	13	水晶切子玉	1.95		1.25	4.40
3	瑪瑙勾玉	2.90	1.10	0.90	5.30	14	水晶切子玉	1.90		1.35	4.30
4	瑪瑙勾玉	2.40	0.85	0.70	3.20	15	水晶切子玉	1.80		1.25	3.70
5	水晶勾玉	3.00	1.30	0.85	6.70	16	水晶切子玉	1.80		1.30	4.10
6	水晶勾玉	2.40	1.15	0.90	5.00	17	碧玉管玉	2.45		0.95	4.20
7	水晶切子玉	2.80		1.45	8.00	18	碧玉大玉	1.10		1.50	3.10
8	水晶切子玉	2.40		1.45	6.20	19	紺色小玉	0.60		0.85	0.60
9	水晶切子玉	2.30		1.60	6.80	20	紺色小玉	0.60		0.70	0.40
10	水晶切子玉	2.25		1.50	6.20	21	紺色小玉	0.55		0.80	0.50
11	水晶切子玉	2.20		1.50	6.40	22	紺色小玉	0.50		0.65	0.30
										総重量	95.10

※勾玉のみ断面をとったところの幅を測定した

蝦夷塚古墳群出土玉類実測図・計測表（参考資料）

参考図版

蝦夷塚古墳群出土玉類（雄物川町教育委員会所蔵）